

● アカゲラ

西ヨーロッパから東アジアまで、ユーラシア大陸の中緯度地域を中心に広く生息する。国内では北海道、本州に生息し、西南日本に少なく、本州中部以北に多い。近畿地方では大阪府を除く6府県に周年生息し繁殖している、あるいはそう考えられる。低山から山地の発達した広葉樹林や針広混交林で営巣し昆虫類を捕らえ餌とする。冬季は平地や丘陵の二次林に現れる（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成14年、山岸哲））。

現地調査では、秋季に対象事業実施区域で6回・延べ6個体、周辺域で2回・延べ2個体、春季に対象事業実施区域で1回・1個体確認された。確認環境はコナラ群落、テーダマツ植林、スギ・ヒノキ植林であった。

同種は年間を通して確認されたが、繁殖行動が確認されなかったこと、確認例も少ないことから対象事業実施区域及びその周辺における繁殖の可能性は少ないと考えられる。

表 8.9.2-25 アカゲラの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	秋季	平成22年10月12日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林にとまる。その後樹冠で枝移りし見えなくなる。
2	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の上空を飛翔し見えなくなる。
3	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林にとまる。その後幹を登り、見えなくなる。
4	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がコナラ群落の木にとまる。その後幹を登り、見えなくなる。
5	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がコナラ群落の林内を飛翔し、見えなくなる。
6	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林にとまる。その後幹を登り、見えなくなる。
7	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の上空を飛翔し、すぐに樹林に入り見えなくなる。
8	秋季	平成22年10月15日	性齢不明がコナラ群落の木にとまる。その後林内を飛翔し見えなくなる。
9	春季	平成23年4月26日	性齢不明がアカマツ群落でとまる。その後林内を飛翔し見えなくなる。

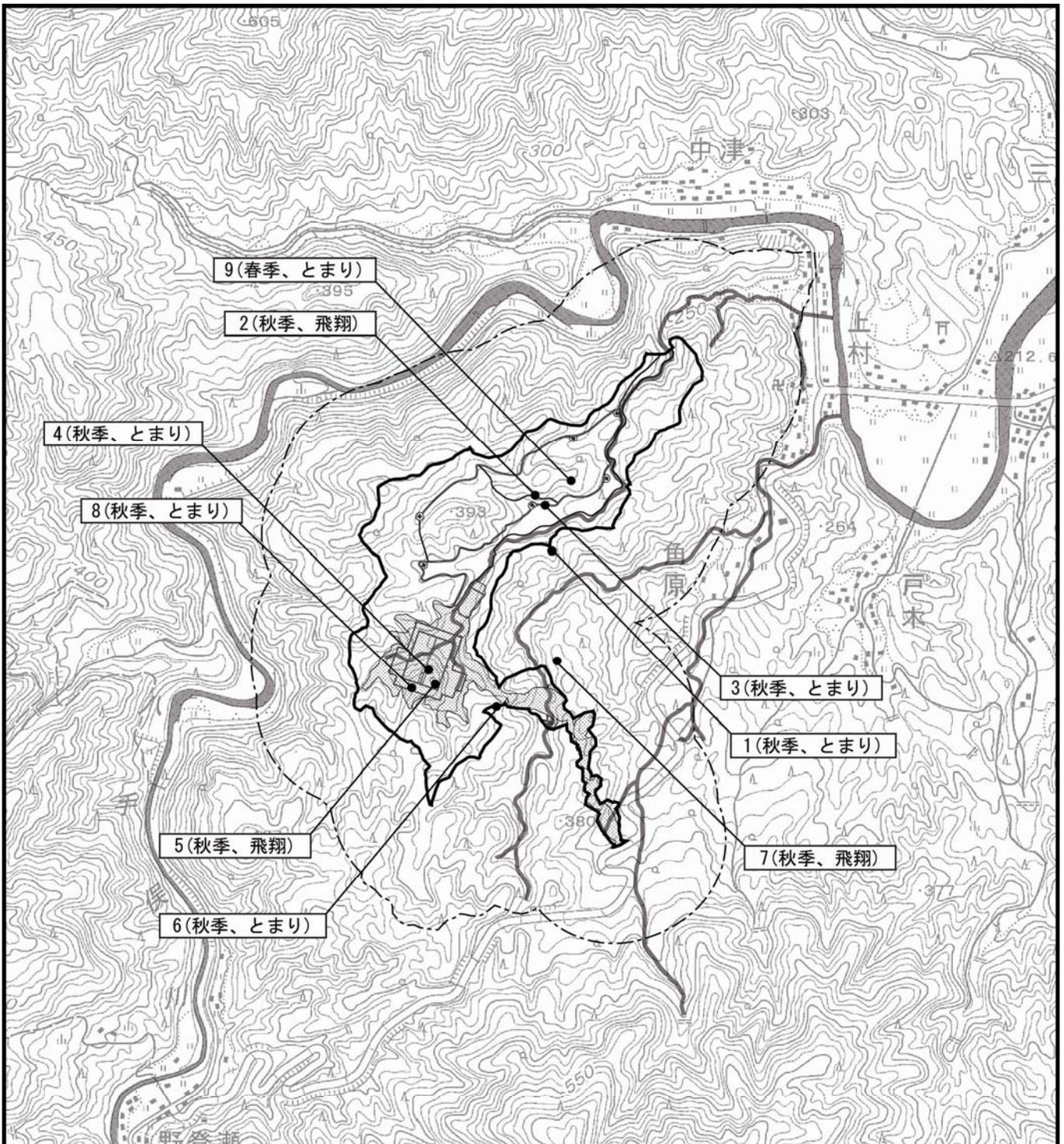


図 8.9.2-23 アカゲラの確認位置

凡 例

- 1(秋季、とまり) : 確認位置 番号(時季、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

—— 対象事業実施区域

⋯⋯ 調査範囲

▨ 改変区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

● オオアカゲラ

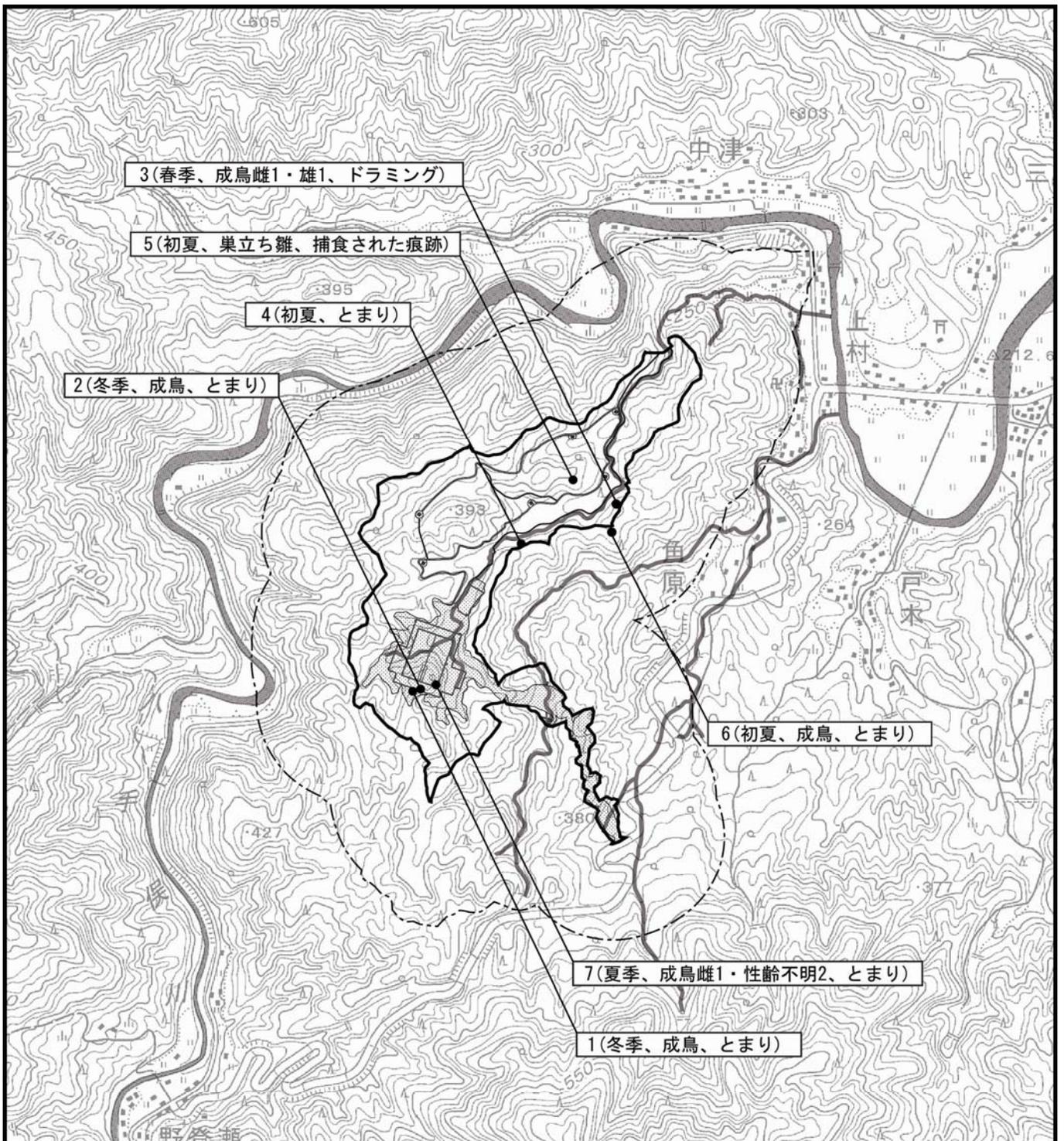
おもに落葉広葉樹林に生息し、枯れた大木に穴を掘って営巣する。ユーラシア大陸の亜寒帯地域に分布する。国内では北海道から本州、四国、九州、奄美大島に生息する。本種は留鳥である。県内ではいなべ市、亀山市、津市美杉町、伊賀市、名張市、松阪市、大台町宮川、大紀町大宮、尾鷲市、熊野市等で生息が確認されている（出典：「三重県レッドデータブック 2005 動物」（平成 18 年、三重県））

現地調査では、冬季に対象事業実施区域で 2 回・延べ 2 個体、春季に対象事業実施区域で 1 回・2 個体、初夏に対象事業実施区域で 2 回・2 個体（幼羽捕食痕含む）、周辺域で 1 回・1 個体、夏季に対象事業実施区域で 1 回・3 個体が確認された。確認環境はコナラ群落、アカマツ群落、テーダマツ植林、スギ・ヒノキ植林であった。

成鳥のドラミングやとまり、巣立ち後の幼鳥の確認位置などから、対象事業実施区域の西側の樹林で繁殖している可能性が高い。

表 8.9.2-26 オオアカゲラの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	冬季	平成 23 年 1 月 31 日	成鳥雌がコナラ群落内の木にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
2	冬季	平成 23 年 2 月 22 日	成鳥雄がコナラ群落内の木にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
3	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄 1 個体と成鳥雌 1 個体がコナラ群落内の木にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。ドラミング有り。
4	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林内の枯木にとまる。その後幹を登り、見えなくなる。
5	初夏	平成 23 年 6 月 2 日	オオアカゲラ幼羽(アカゲラと比べ明らかに大きい伸長中の風切羽の鞘付き、両翼で主に次列の左右 7 枚ずつ)がテーダマツ植林内に落ちていた。羽軸や鞘が非常に新しい。巣立ち幼鳥が捕食された痕跡と思われる
6	初夏	平成 23 年 6 月 3 日	成鳥雌がスギ・ヒノキ植林内の枯木にとまる。その後幹を登り、見えなくなる。
7	夏季	平成 23 年 7 月 28 日	成鳥雌 1 個体と性齢不明の 2 個体がコナラ群落とスギ・ヒノキ植林の境界付近の樹木にとまる。その後枝移りし、見えなくなる。



凡 例

- 1(冬季、成鳥、とまり) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

— 対象事業実施区域

⋯ 調査範囲

◐ 変更区域



1:15,000

0 100 200 300 400 500m

図 8.9.2-24 オオアカゲラの確認位置

- ビンズイ

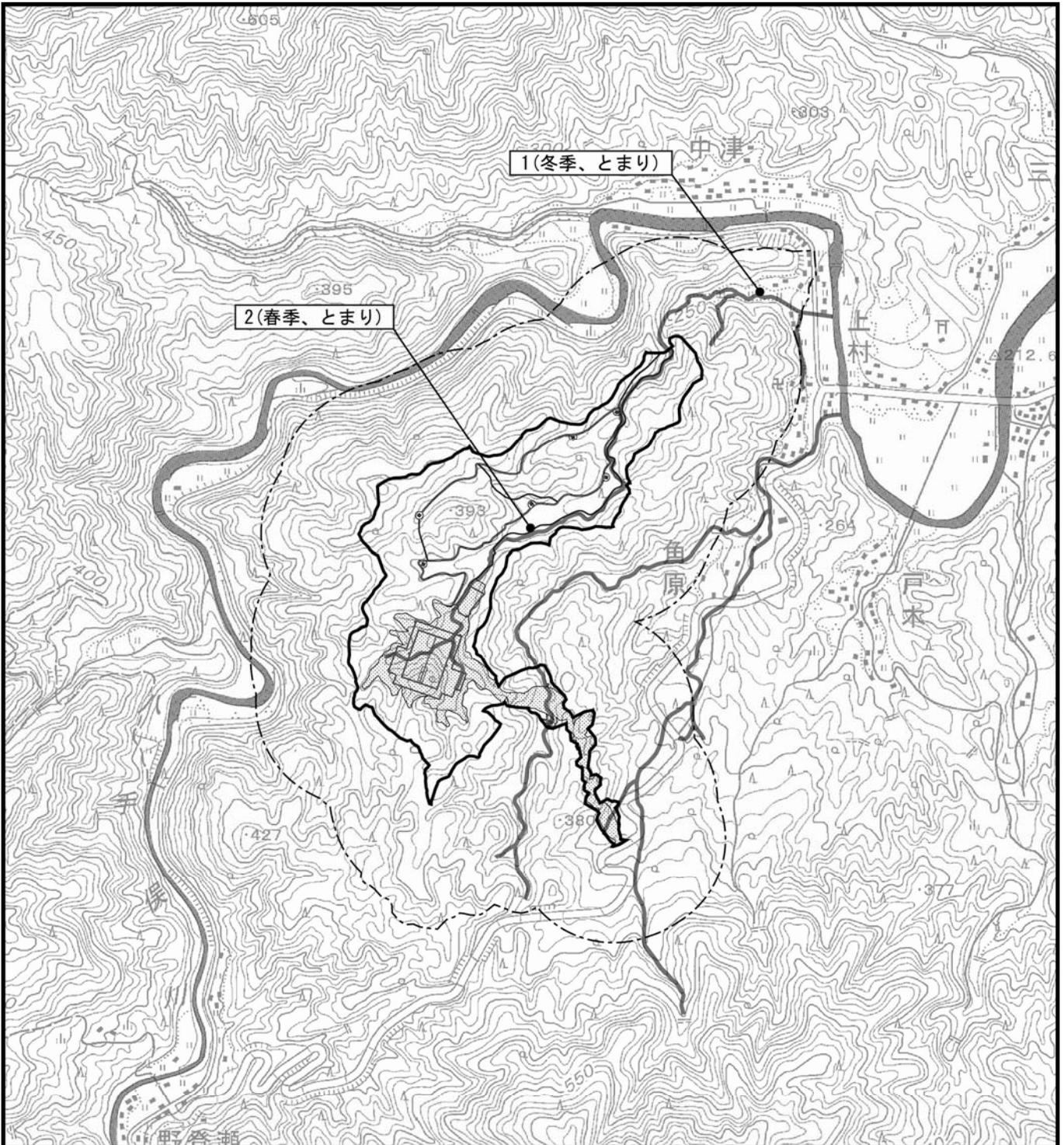
国内ではおもに本州中部以北で繁殖し、本州以南で越冬する。国内ではおもに本州中部以北で繁殖し、本州以南で越冬する。近畿地方での繁殖地は大台ヶ原山系と大峰山系の上部に限られている。林床を歩きながら昆虫類や木の実を食べる（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成 14 年、山岸哲他））。

現地調査では、冬季に周辺域で 1 回・1 個体、春季に対象事業実施区域で 1 回・1 個体が確認された。確認環境は林縁の水田や湿地草本群落であった。

本種は冬鳥であり、確認状況から越冬個体、または移動個体と考えられる。

表 8.9.2-27 ビンズイの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	性齢不明が放棄水田雑草群落の地上におりる。その後飛び立ち見えなくなる。
2	春季	平成 23 年 4 月 26 日	性齢不明が湿地草本群落の地上におりる。その後飛び立ち見えなくなる。



凡 例

- 1(冬季、とまり) : 確認位置 番号(時季、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-25 ビンズイの確認位置

- 対象事業実施区域
- ⋯⋯ 調査範囲
- ▨ 変更区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

● サンショウクイ

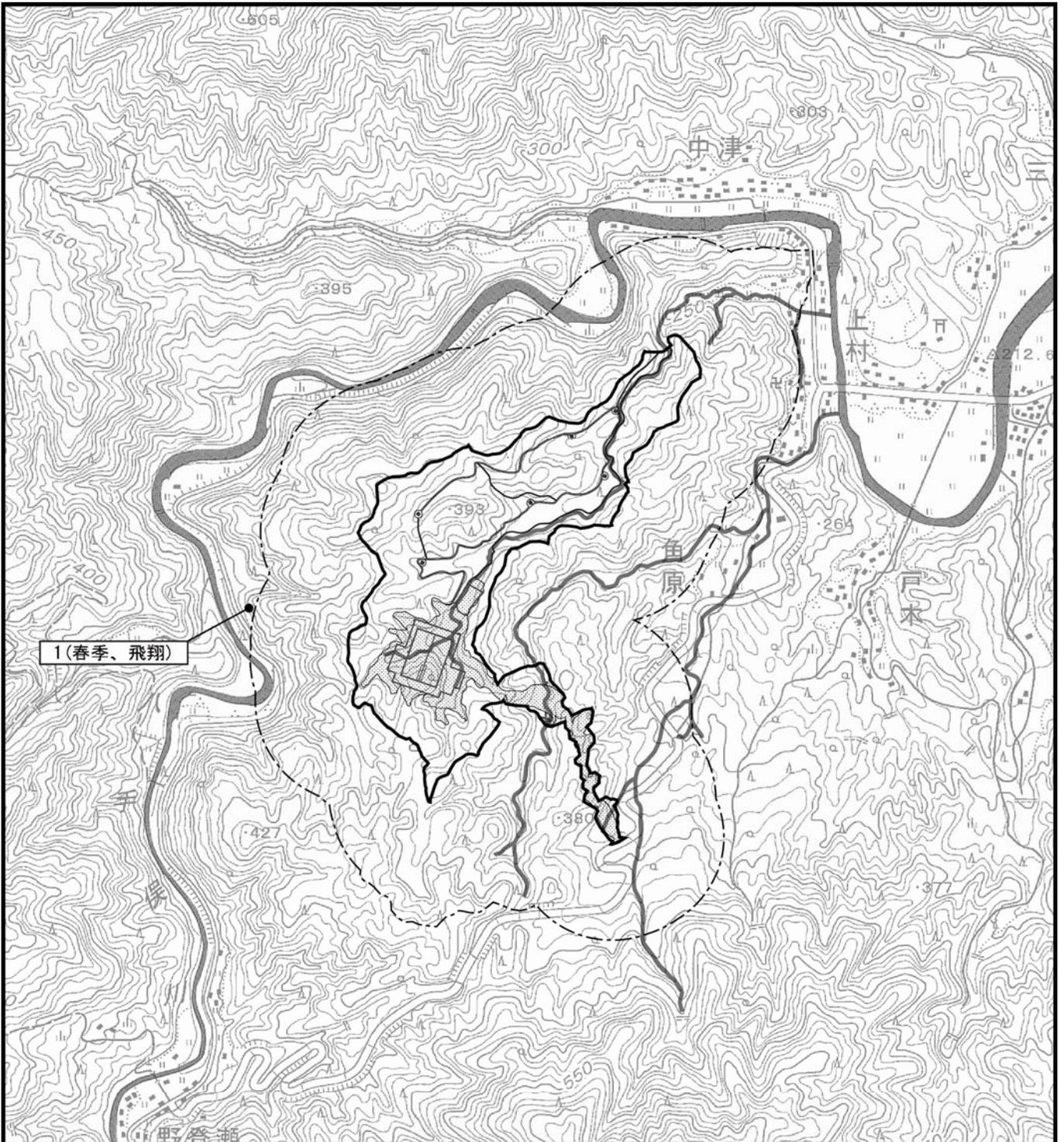
国内では夏鳥として渡来し、本州以南で繁殖する。県内では、1995年に津市美里町で繁殖記録がある。また、春と秋の渡りの時期に比較的多く観察され、いなべ市、鈴鹿市、亀山市、松阪市、伊勢市、熊野市等で記録がある。餌は昆虫類を食べる(参考:「三重県レッドデータブック 2005 動物」(平成 18 年、三重県))。

現地調査では、春季に周辺域で 1 回・1 個体が確認された。確認環境は上空であった。

本種は夏鳥であり、春季の上空通過個体のみ確認であった。そのため、渡り期の移動個体と考えられる。

表 8.9.2-28 サンショウクイの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	春季	平成 23 年 4 月 26 日	性齢不明が高空で飛翔しながら鳴く。北方向へ移動する。



凡 例

- **1 (春季、飛翔)** : 確認位置 **番号(時季、状況)**

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-26 サンショウウケイの確認位置

- 対象事業実施区域
- ⋯⋯ 調査範囲
- 改変区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

● カワガラス

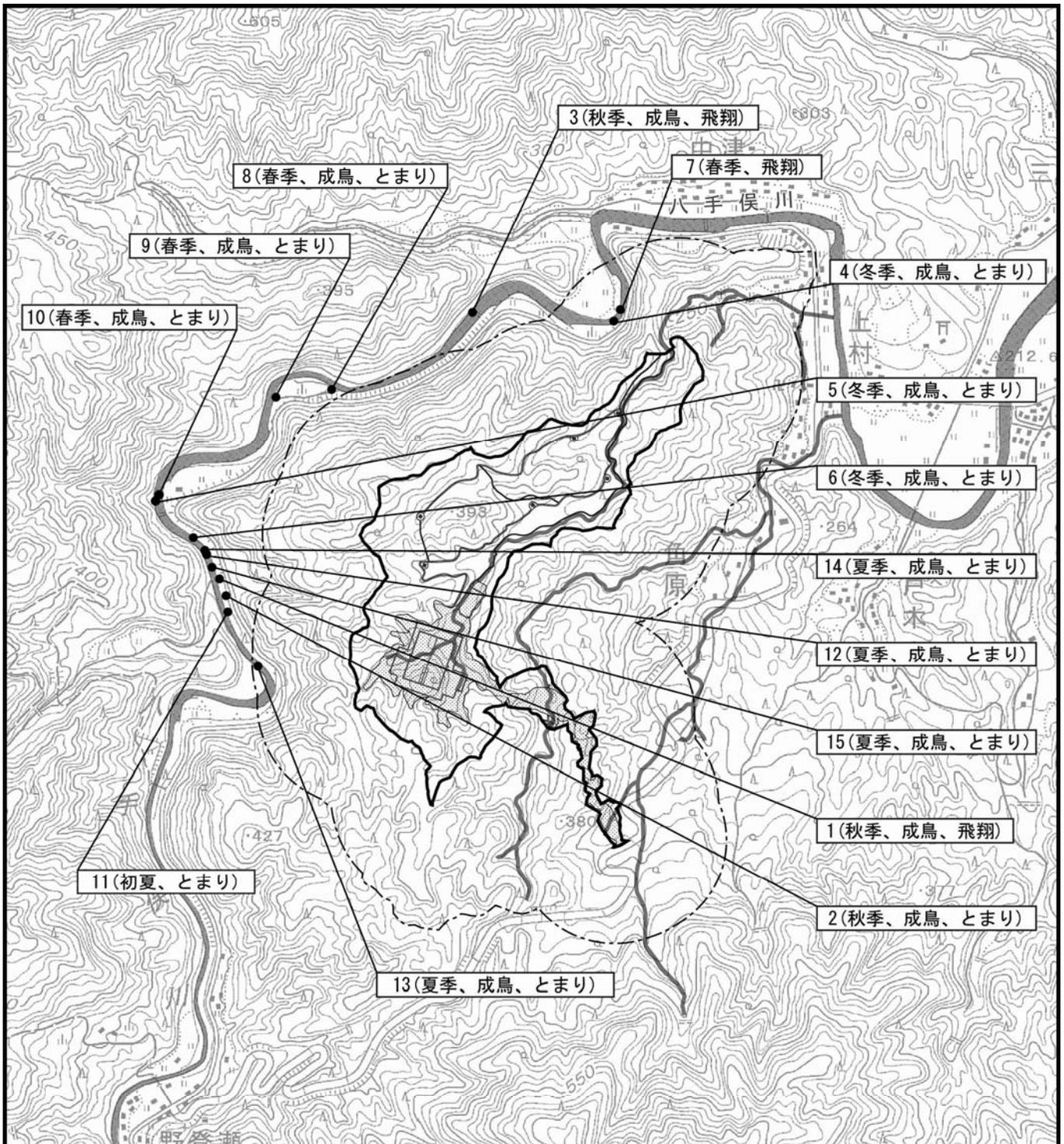
国内では、北海道、本州、四国、九州等に生息する。近畿地方の全府県に留鳥として周年生息し繁殖している。林内を流れる河川の上流から中流にかけて営巣し水生昆虫類などを捕らえる。山間の棚田等の用水路にも出現する（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成 14 年、山岸哲)）。

現地調査では、秋季に周辺域で 3 回・延べ 3 個体、冬季に周辺域で 3 回・延べ 3 個体、春季に周辺域で 4 回・延べ 4 個体、初夏に周辺域で 1 回・1 個体、夏季に周辺域で 4 回・延べ 4 個体確認された。確認環境は河川（八手俣川）であった。

本種は八手俣川で通年確認されたが、繁殖に係る行動は確認されていない。

表 8.9.2-29 カワガラスの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	秋季	平成 22 年 10 月 14 日	成鳥性不明が八手俣川から支流へ飛翔し見えなくなる。
2	秋季	平成 22 年 10 月 14 日	成鳥性不明が八手俣川の石の上でとまり、その後上流方向へ飛翔し見えなくなる。
3	秋季	平成 22 年 10 月 15 日	成鳥性不明が八手俣川で飛翔する。鳴き声有り。
4	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、岩陰で見えなくなる。
5	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、水に潜り見えなくなる。
6	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、上流に飛び立ち見えなくなる。
7	春季	平成 23 年 4 月 19 日	性齢不明が八手俣川の水辺で鳴きながら飛翔する。
8	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、物陰にかくれ見えなくなる。
9	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。歩行した後、下流方向へ飛翔し見えなくなる。
10	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、物陰にかくれ見えなくなる。
11	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	性齢不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、物陰にかくれ見えなくなる。
12	夏季	平成 23 年 7 月 12 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、岩陰で見えなくなる。
13	夏季	平成 23 年 7 月 12 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、岩陰で見えなくなる。
14	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、岩陰で見えなくなる。
15	夏季	平成 23 年 7 月 27 日	成鳥性不明が八手俣川の水辺でとまる。その後歩行し、岩陰で見えなくなる。



凡 例

- 1(秋季、成鳥、飛翔) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-27 カワガラスの確認位置

— 対象事業実施区域

⋯ 調査範囲

◐ 改変区域



1:15,000

0 100 200 300 400 500m

● ミソサザイ

国内では北海道、本州、四国、九州等に生息する。近畿地方の全府県に留鳥として周年生息し繁殖している。山地の溪流沿いの広葉樹や針広混交の倒木や岩石の多い発達した林で営巣する。餌は昆虫類やクモ類である。山中の橋梁や建造物にも営巣する。冬季は低山や平地にも現われ、藪や人家の垣根でも餌をとる（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成14年、山岸哲）他）。

現地調査では、秋季に周辺域で2回・延べ2個体、冬季に対象事業実施区域で1回・延べ1個体、周辺域で11回・延べ11個体、春季に対象事業実施区域で12回・延べ12個体、周辺域で9回・延べ9個体、初夏に対象事業実施区域で2回・2個体、周辺域で1回・延べ1個体、夏季に対象事業実施区域で1回・1個体が確認された。確認環境は沢周辺（溪流周辺）、スギ・ヒノキ植林等であった。

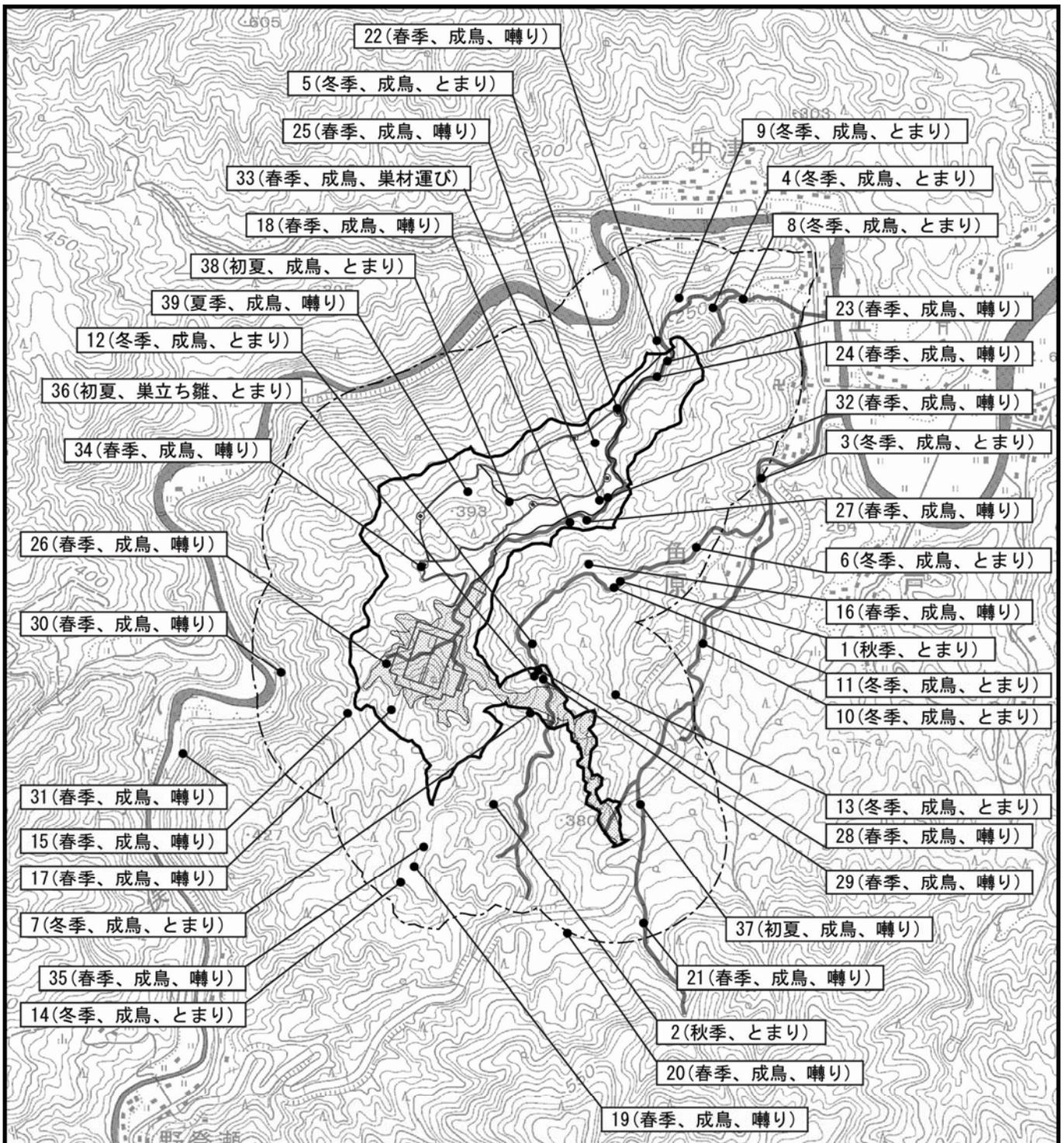
本種は留鳥であり、春季にコケを運ぶ巣材運び、初夏に幼鳥（巣立ち雛）が確認されているため、対象事業実施区域及び周辺域で繁殖したと考えられる。

表 8.9.2-30 (1) ミソサザイの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
2	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
3	冬季	平成23年1月31日	成鳥性不明が角原川岸辺の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
4	冬季	平成23年2月1日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
5	冬季	平成23年2月1日	成鳥性不明が高山川岸辺（スギ・ヒノキ植林）の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
6	冬季	平成23年2月1日	成鳥性不明が角原川支流岸辺（スギ・ヒノキ植林）の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
7	冬季	平成23年2月1日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
8	冬季	平成23年2月2日	成鳥性不明が高山川岸辺の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、見えなくなる。
9	冬季	平成23年2月2日	成鳥性不明が高山川岸辺（伐採跡地群落）の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
10	冬季	平成23年2月2日	成鳥性不明が角原川岸辺の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
11	冬季	平成23年2月4日	成鳥性不明が角原川支流岸辺の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
12	冬季	平成23年2月4日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、物陰で見えなくなる。
13	冬季	平成23年2月4日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
14	冬季	平成23年2月4日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまる。地鳴きしながら跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
15	春季	平成23年3月30日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。

表 8.9.2-30 (2) ミソサザイの確認状況

No.	確認時期		確認内容
16	春季	平成 23 年 4 月 11 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
17	春季	平成 23 年 4 月 12 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
18	春季	平成 23 年 4 月 13 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
19	春季	平成 23 年 4 月 13 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上にとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
20	春季	平成 23 年 4 月 13 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
21	春季	平成 23 年 4 月 13 日	成鳥性不明が角原川の岸边やスギ・ヒノキ植林の地上にとまり、囀る。その後跳び歩き、物陰で見えなくなる。
22	春季	平成 23 年 4 月 14 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
23	春季	平成 23 年 4 月 14 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
24	春季	平成 23 年 4 月 14 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
25	春季	平成 23 年 4 月 14 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
26	春季	平成 23 年 4 月 25 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、倒木の陰で見えなくなる。
27	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
28	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
29	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、物陰で見えなくなる。
30	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
31	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
32	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、倒木の陰で見えなくなる。
33	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後コケを運んでいた。
34	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上でとまり、囀る。その後跳び歩き、茂みに入り見えなくなる。
35	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の地上にとまり、囀る。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
36	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	幼鳥(巣立ち雛)がスギ・ヒノキ植林の地上にとまる。倒木の間を点々と跳び歩き、窪地には入り見えなくなる。
37	初夏	平成 23 年 6 月 2 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内の地上でとまり、囀る。その後を跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
38	初夏	平成 23 年 6 月 3 日	成鳥性不明がコナラ群落内の地上にとまる。その後跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。
39	夏季	平成 23 年 7 月 27 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内の地上でとまり、囀る。その後を跳び歩き、窪地に入り見えなくなる。



凡 例

- 1(春季、成鳥、歩行) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-28 ミソサザイの確認位置

— 対象事業実施区域

○ 調査範囲

● 改変区域



1:15,000

0 100 200 300 400 500m

• ルリビタキ

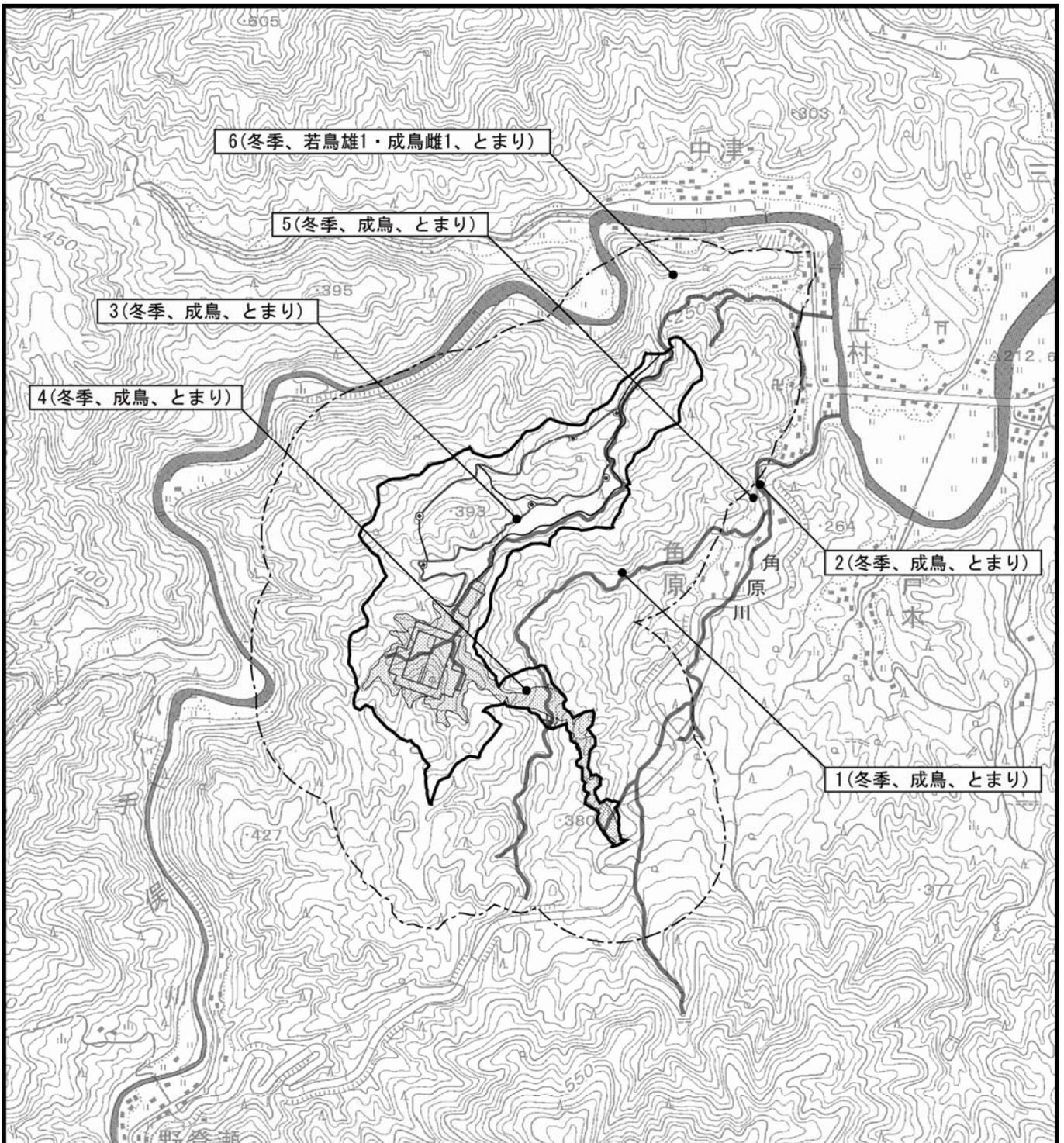
国内では北海道、本州、四国等で繁殖し、本州、四国、九州で越冬する。近畿地方では冬季は全府県に生息するが、三重県では繁殖している。比較的高地の林の林内で営巣し餌をとる。冬季は平地から低山の暗い林や林縁部に現れ餌をとる。餌は昆虫類である（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成 14 年、山岸哲））。

現地調査では、冬季に対象事業実施区域で 2 回・延べ 2 個体、周辺域で 4 回・延べ 5 個体が確認された。確認環境はアラカシ群落、スギ・ヒノキ植林、コナラ群落、沢周辺（角原川）であった。

本種は冬鳥であり、確認状況から越冬個体と考えられる。

表 8.9.2-31 ルリビタキの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	冬季	平成 23 年 1 月 31 日	成鳥雌がスギ・ヒノキ植林の下層の枝にとまり、その後枝移りし、物陰で見えなくなる。
2	冬季	平成 23 年 1 月 31 日	成鳥雄が角原川岸辺の石にとまる。その後点々と跳び歩き、物陰で見えなくなる。
3	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	成鳥雄がコナラ群落の樹木の枝にとまり、その後飛び立ち見えなくなる。
4	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林の下層の枝にとまり、その後枝移りし、物陰で見えなくなる。
5	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	成鳥雌がスギ・ヒノキ植林の下層にとまる。その後枝移りし、物陰で見えなくなる。
6	冬季	平成 23 年 2 月 3 日	若鳥雄 1 個体、成鳥雌 1 個体がアラカシ群落の下層の枝にとまり、その後枝移りし、物陰で見えなくなる。



凡 例

- 1(冬季、成鳥、とまり) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-29 ルリビタキの確認位置

- 対象事業実施区域
- ⋯⋯ 調査範囲
- ▨ 改変区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

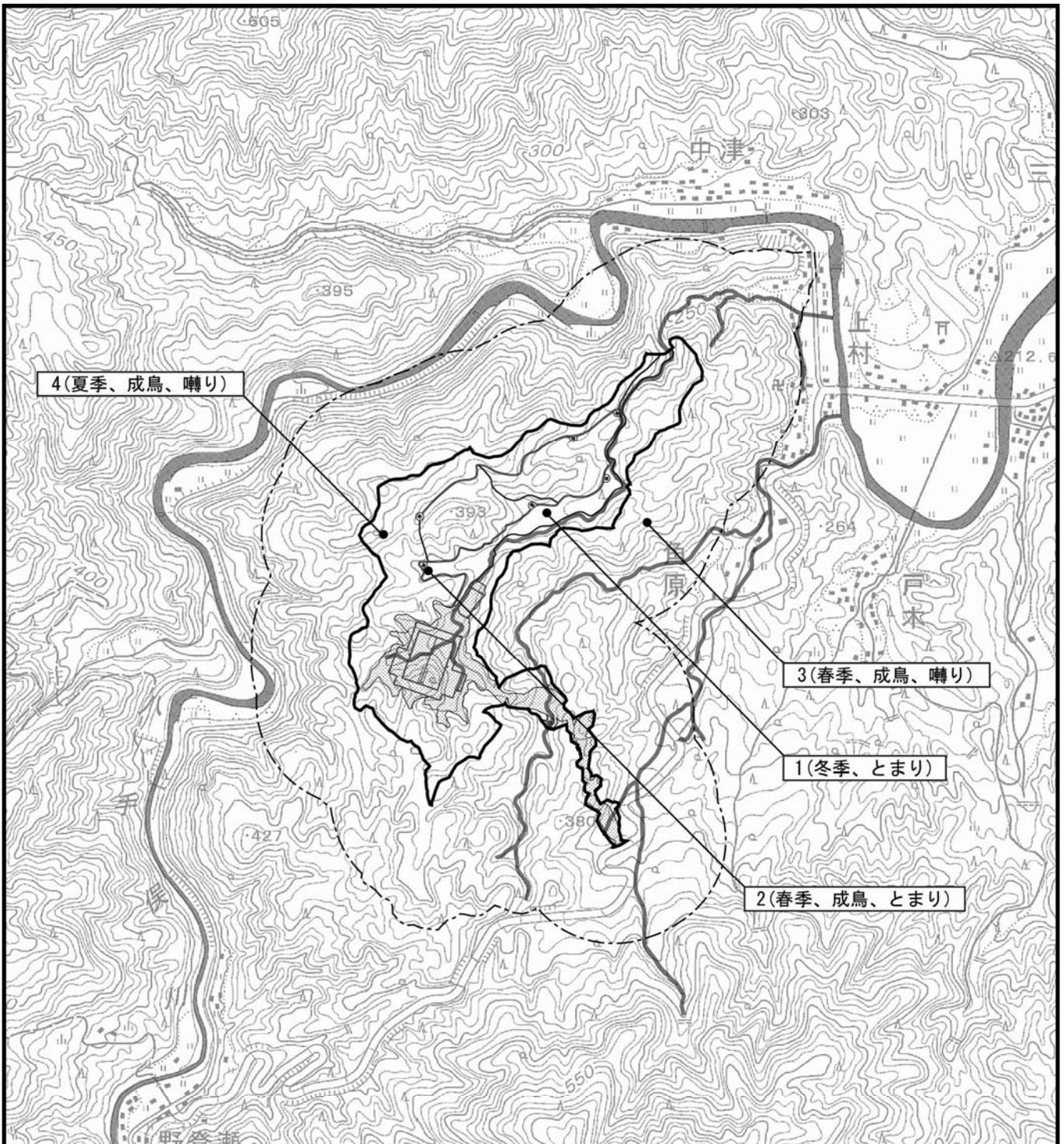
• **トラツグミ**

国内では、北海道、本州、四国、九州等で繁殖し、主に本州、四国、九州で越冬する。近畿地方では全府県に留鳥として周年生息し繁殖している、もしくはそう考えられる。低山から山地にかけての広葉樹林や針広混交林の林内・林縁で営巣し餌をとる。冬季は平地の緑地にも現れて餌をとる。林床を歩きながらミミズなどの土壌動物や昆虫類、木の実などを食べる（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成 14 年、山岸哲））。

現地調査では冬季に対象事業実施区域で 1 回・1 個体、春季に対象事業実施区域で 1 回・1 個体、周辺域で 1 回・1 個体、夏季に対象事業実施区域で 1 回・1 個体が確認された。確認環境はスギ・ヒノキ植林と湿地草本群落であった。

表 8.9.2-32 トラツグミの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	性齢不明が湿地草本群落の地上にとまり、地面をついばんでいた。その後飛び立ち見えなくなる。
2	春季	平成 23 年 4 月 20 日	成鳥性不明が湿地草本群落の地上にとまり、地面をついばんでいた。その後飛び立ち見えなくなる。
3	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
4	夏季	平成 23 年 7 月 27 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。



凡 例

- 1(春季、成鳥、歩行) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-30 トラツグミの確認位置

- 対象事業実施区域
- ⋯⋯ 調査範囲
- 変更区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

● クロツグミ

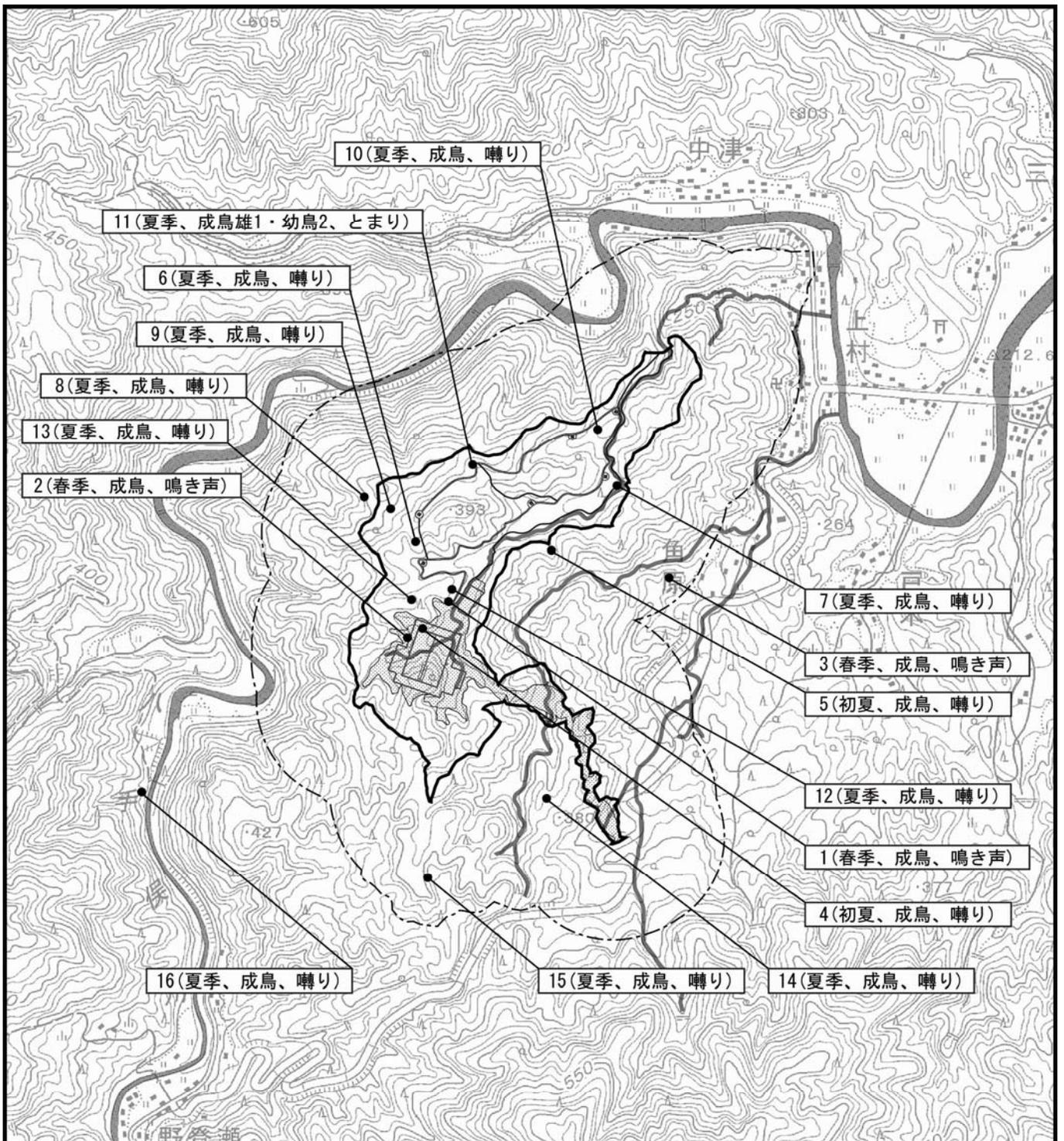
平地から山地の森林に生息し、地上でミミズや昆虫類、木の実などを食べる。日本と中国南部で繁殖し、冬は中国南部やインドシナ半島に渡って越冬する。国内では北海道から九州で繁殖する。県内では、いなべ市、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、津市、伊勢市、大台町、御浜町などほぼ全域の広葉樹林で生息が確認されている(参考:「三重県レッドデータブック 2005 動物」(平成 18 年、三重県))。

現地調査では春季に対象事業実施区域で 2 回・延べ 2 個体、周辺域で 1 回・1 個体、初夏に対象事業実施区域で 1 回・1 個体、周辺域で 1 回・1 個体、夏季に対象事業実施区域で 7 回・延べ 9 個体、周辺域で 4 回・延べ 4 個体が確認された。確認環境はスギ・ヒノキ植林、コナラ群落であった。

本種は夏鳥であり、夏季に幼鳥が確認されたため、対象事業実施区域及び周辺域で繁殖している。

表 8.9.2-33 クロツグミの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	春季	平成 23 年 4 月 20 日	成鳥雄がコナラ群落内で鳴く。
2	春季	平成 23 年 4 月 21 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で鳴く。
3	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林の木の頂点付近で鳴く。
4	初夏	平成 23 年 6 月 1 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
5	初夏	平成 23 年 6 月 21 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
6	夏季	平成 23 年 7 月 11 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
7	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
8	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
9	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
10	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
11	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥雄 1 個体、幼鳥 2 個体が広葉樹林内の木にとまる。
12	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥雄がコナラ群落内で囀る。
13	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥雄がコナラ群落内で囀る。
14	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
15	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
16	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内で囀る。



凡 例

- 1(春季、成鳥、鳴き声) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

— 対象事業実施区域

○ 調査範囲

● 変更区域



1:15,000

0 100 200 300 400 500m

図 8.9.2-31 クロツグミの確認位置

● メボソムシクイ

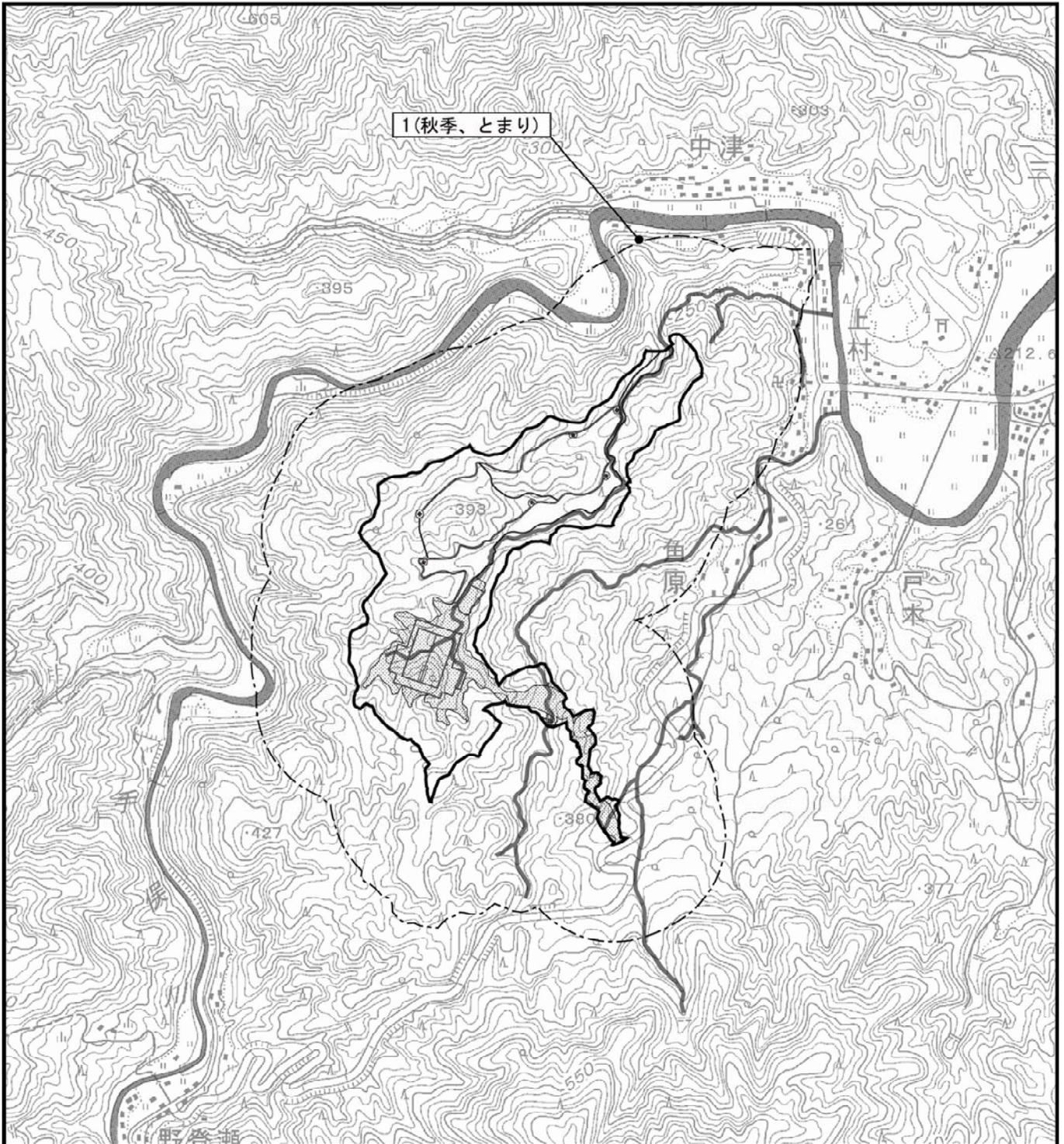
日本では北海道、本州、四国に夏鳥として渡来して繁殖する。繁殖地は亜高山帯針葉樹林や森林限界のダケカンバ林、日本海側ではブナ帯の上部で見られる。渡り期には低地や低山帯のマツ林や雑木林で見られる。茂みの間を活発に動きながら昆虫類やクモ類を捕える。県内では、いなべ市、菰野町、亀山市、津市、伊勢市、尾鷲市、熊野市等で記録がある。1979年紀北町海山区の大台山系で繁殖していることが確認されている。本種は三重県では旅鳥とされている(参考:「原色 日本野鳥生態図鑑〈陸鳥編〉」(平成7年、保育社)、「三重県レッドデータブック 2005 動物」(平成18年、三重県))。

現地調査では秋季に周辺域で1回・1個体が確認された。確認環境はスギ・ヒノキ植林であった。

本種は旅鳥であり、確認状況から渡り期の移動個体と考えられる。

表 8.9.2-34 メボソムシクイの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	秋季	平成22年10月14日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林下層の茂みでとまり、地鳴きしていた。



凡 例

- 1(秋季、とまり) : 確認位置 番号(時季、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-32 メボソムシクイの確認位置

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
- 変更区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

- センダイムシクイ

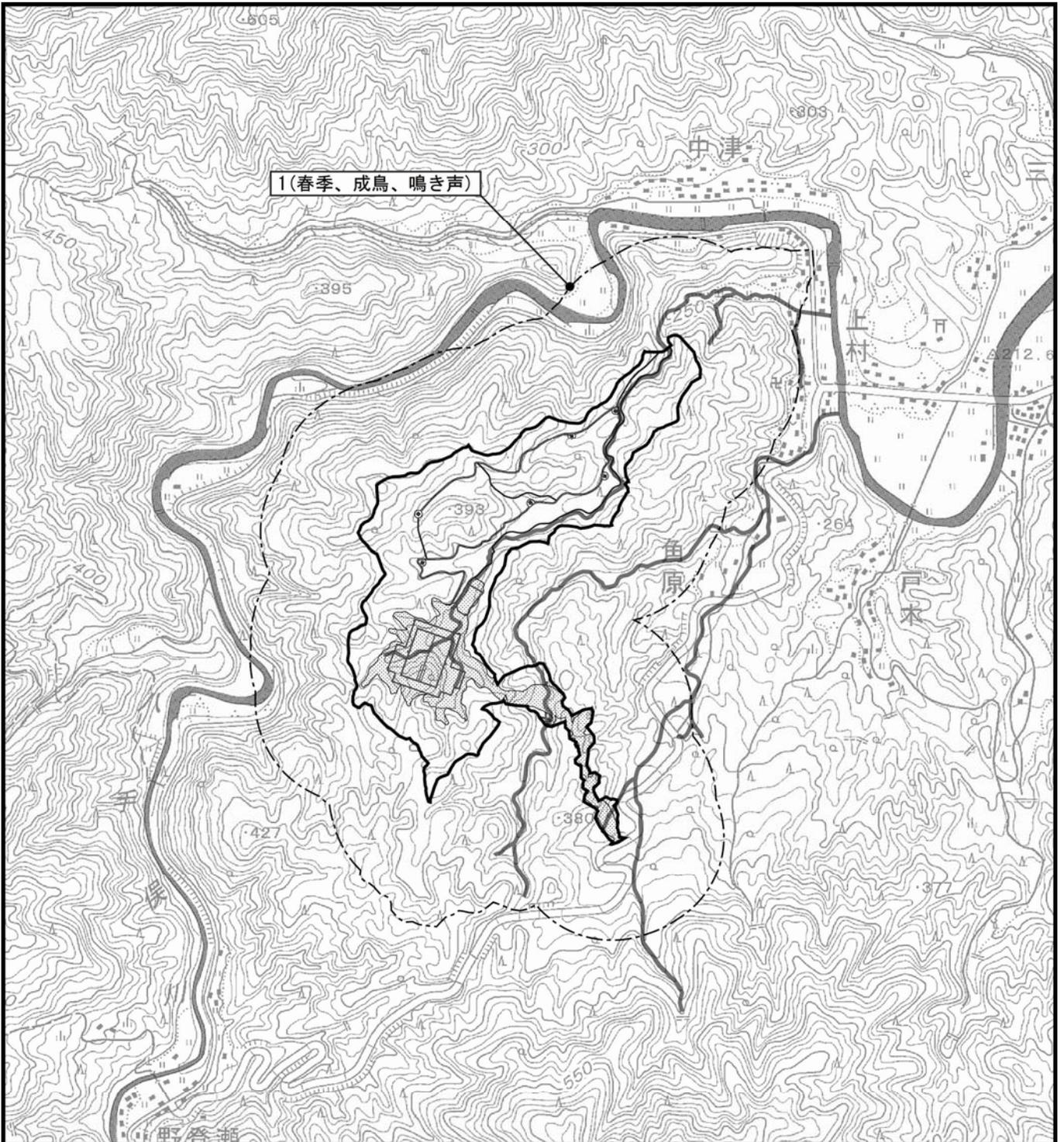
低山帯の落葉広葉樹林に生息し、葉や枝についている昆虫類を食べる。比較的急峻な林を好み、崖地のくぼみや草の根元に営巣する。茂みの間を活発に動きながら昆虫類を捕える。国内では九州以北で繁殖する。県内では、いなべ市、四日市市、亀山市、伊賀市、津市、松阪市、伊勢市、大台町宮川、尾鷲市などに確認記録がある。大台町大台ヶ原では繁殖の可能性がある（参考：「三重県レッドデータブック 2005 動物」（平成 18 年、三重県））。

現地調査では、春季に周辺域で 1 回・1 個体が確認された。確認環境はスギ・ヒノキ植林であった。

本種は夏鳥であり、確認状況から渡り期の移動個体と考えられる。

表 8.9.2-35 センダイムシクイの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	春季	平成 23 年 4 月 21 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で鳴く。



凡 例

- 1(春季、成鳥、鳴き声) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-33 センダイムシクイの確認位置

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
- 改変区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

● キビタキ

山地の落葉広葉樹林に生息し、林内で昆虫類を食べる。国内ではほぼ全国に渡来し、繁殖する。県内では、いなべ市、菟野町、亀山市、伊賀市、名張市、松阪市、伊勢市、尾鷲市、御浜町などで確認されている（参考：「三重県レッドデータブック 2005 動物」（平成 18 年、三重県））。

春季に対象事業実施区域で 8 回・延べ 9 個体、周辺域で 2 回・延べ 2 個体、初夏に対象事業実施区域で 9 回・延べ 9 個体、周辺域で 9 回・延べ 9 個体、夏季に対象事業実施区域で 8 回・8 個体、周辺域で 3 回・延べ 5 個体が確認された。確認環境はコナラ群落、アラカシ群落、スギ・ヒノキ植林、竹林等であった。

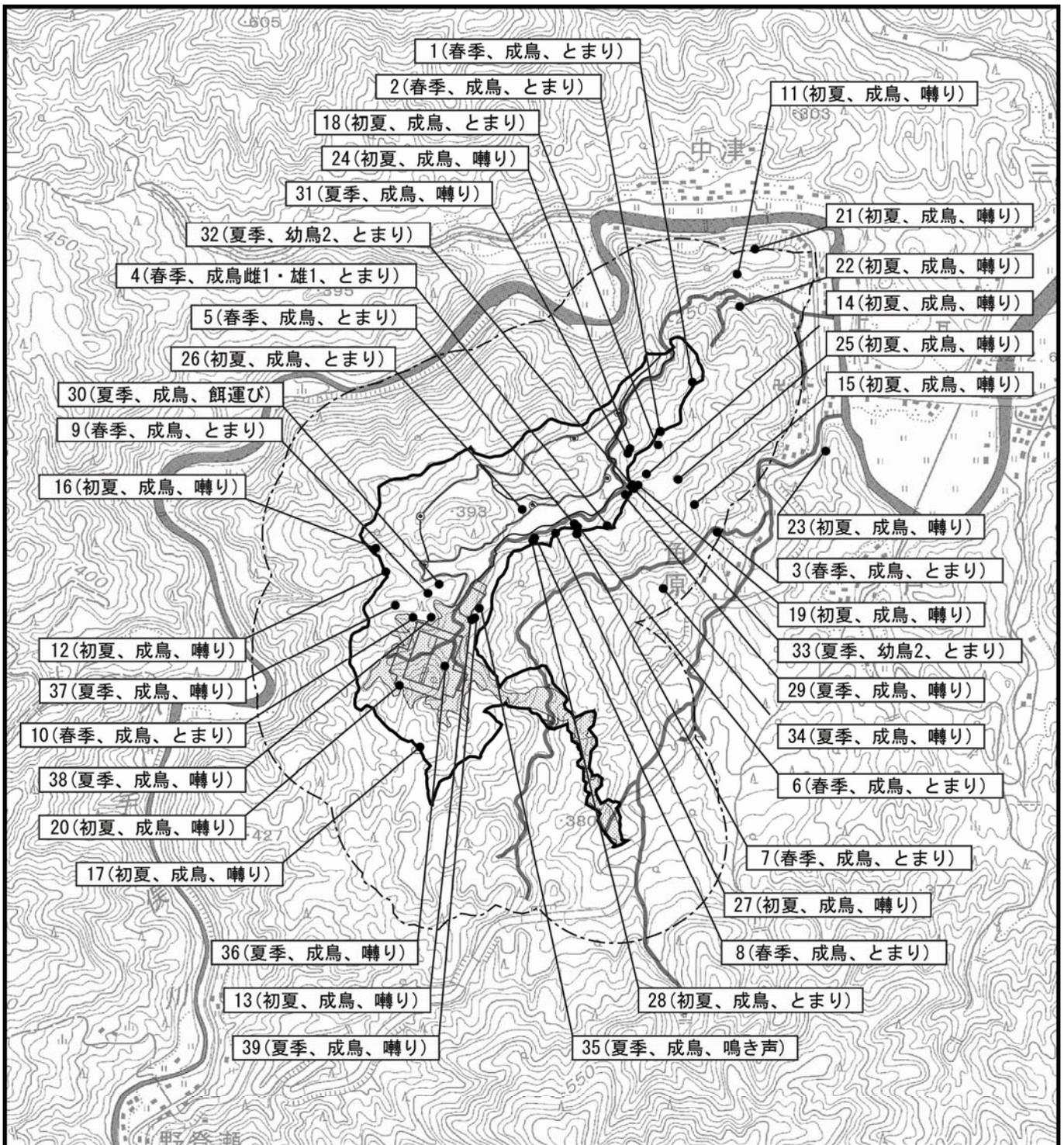
本種は夏鳥であり、夏季に幼鳥が確認されたため、対象事業実施区域及び周辺域で繁殖している。

表 8.9.2-36 (1) キビタキの確認状況

No.	確認時期		確認内容
	季節	日付	
1	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄がコナラ群落の木の枝にとまり、鳴く。樹冠内を枝移りし、見えなくなる。
2	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄がコナラ群落の木の枝にとまり、鳴く。樹冠内を枝移りし、見えなくなる。
3	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林の木にとまり、鳴く。その後飛び立ち見えなくなる。
4	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄 1 個体、成鳥雌 1 個体がコナラ群落の木の枝にとまり、鳴く。樹冠内を枝移りし、見えなくなる。
5	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄がコナラ群落の木の枝にとまる。樹冠内を枝移りし、見えなくなる。
6	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄がコナラ群落の木の枝にとまり、鳴く。樹冠内を枝移りし、見えなくなる。
7	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥雄がコナラ群落の木の枝にとまり、鳴く。樹冠内を枝移りし、見えなくなる。
8	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥雌がコナラ群落の木の枝にとまる。樹冠内を枝移りし、見えなくなる。
9	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥雄がコナラ群落内でとまり、鳴く。
10	春季	平成 23 年 4 月 27 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内でとまり、鳴く。
11	初夏	平成 23 年 5 月 18 日	成鳥雄がアラカシ群落の下層でとまる。轉りながら、点々と枝移りし、見えなくなる。
12	初夏	平成 23 年 5 月 18 日	成鳥雄がコナラ群落の樹冠でとまり、轉る。その後飛び立ち見えなくなる。
13	初夏	平成 23 年 5 月 18 日	成鳥雄がコナラ群落の樹冠でとまり、轉る。その後飛び立ち見えなくなる。
14	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	成鳥性不明が竹林で轉る。
15	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で轉る。
16	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内でとまり、轉る。
17	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	成鳥雄がコナラ群落とスギ・ヒノキ植林の境界付近でとまり、時より轉る。その後飛び立ち見えなくなる。
18	初夏	平成 23 年 6 月 1 日	成鳥雄がコナラ群落内の木にとまる。林内を枝移りし、見えなくなる。

表 8.9.2-36 (2) キビタキの確認状況

No.	確認時期		確認内容
19	初夏	平成 23 年 6 月 1 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内でとまり、囀る。その後飛び立ち見えなくなる。
20	初夏	平成 23 年 6 月 1 日	成鳥雄がコナラ群落の樹冠でとまり、囀る。その後飛び立ち見えなくなる。
21	初夏	平成 23 年 6 月 2 日	成鳥雄がアラカシ群落とスギ・ヒノキ植林の境界付近でとまり、囀る。その後枝移りし、見えなくなる。
22	初夏	平成 23 年 6 月 2 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
23	初夏	平成 23 年 6 月 2 日	成鳥性不明がコナラ群落内で囀る。
24	初夏	平成 23 年 6 月 3 日	成鳥雄がコナラ群落の樹冠でとまり、囀る。その後飛び立ち見えなくなる。
25	初夏	平成 23 年 6 月 3 日	成鳥雄がコナラ群落の樹冠でとまり、囀る。その後飛び立ち見えなくなる。
26	初夏	平成 23 年 6 月 3 日	成鳥雌がコナラ群落の木の樹冠にとまる。その後飛翔し見えなくなる。
27	初夏	平成 23 年 6 月 3 日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林内で囀る。
28	初夏	平成 23 年 6 月 3 日	成鳥雄がコナラ群落の木の樹冠にとまる。その後枝移りし、見えなくなる。
29	夏季	平成 23 年 7 月 12 日	成鳥性不明がコナラ群落内で囀る。
30	夏季	平成 23 年 7 月 12 日	成鳥雄がコナラ群落の枝にとまる。芋虫を持ち、飛翔し見えなくなる。
31	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	成鳥雄がコナラ群落内でとまり、囀る。
32	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	幼鳥 2 個体がコナラ群落とスギ・ヒノキ植林の境界付近樹冠にとまる。
33	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	幼鳥 2 個体がスギ・ヒノキ植林の樹冠にとまる。
34	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内でとまり、囀る。
35	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	成鳥性不明がコナラ群落内で地鳴きする。
36	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	成鳥雄がコナラ群落内でとまり、囀る。
37	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥雄がコナラ群落の枝にとまり、囀る。
38	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥性不明がコナラ群落内で囀る。
39	夏季	平成 23 年 7 月 14 日	成鳥性不明がコナラ群落内で囀る。



凡 例

- 1(春季、成鳥、とまり) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-34 キビタキの確認位置

— 対象事業実施区域

○ 調査範囲

● 改変区域



1:15,000

0 100 200 300 400 500m

● オオルリ

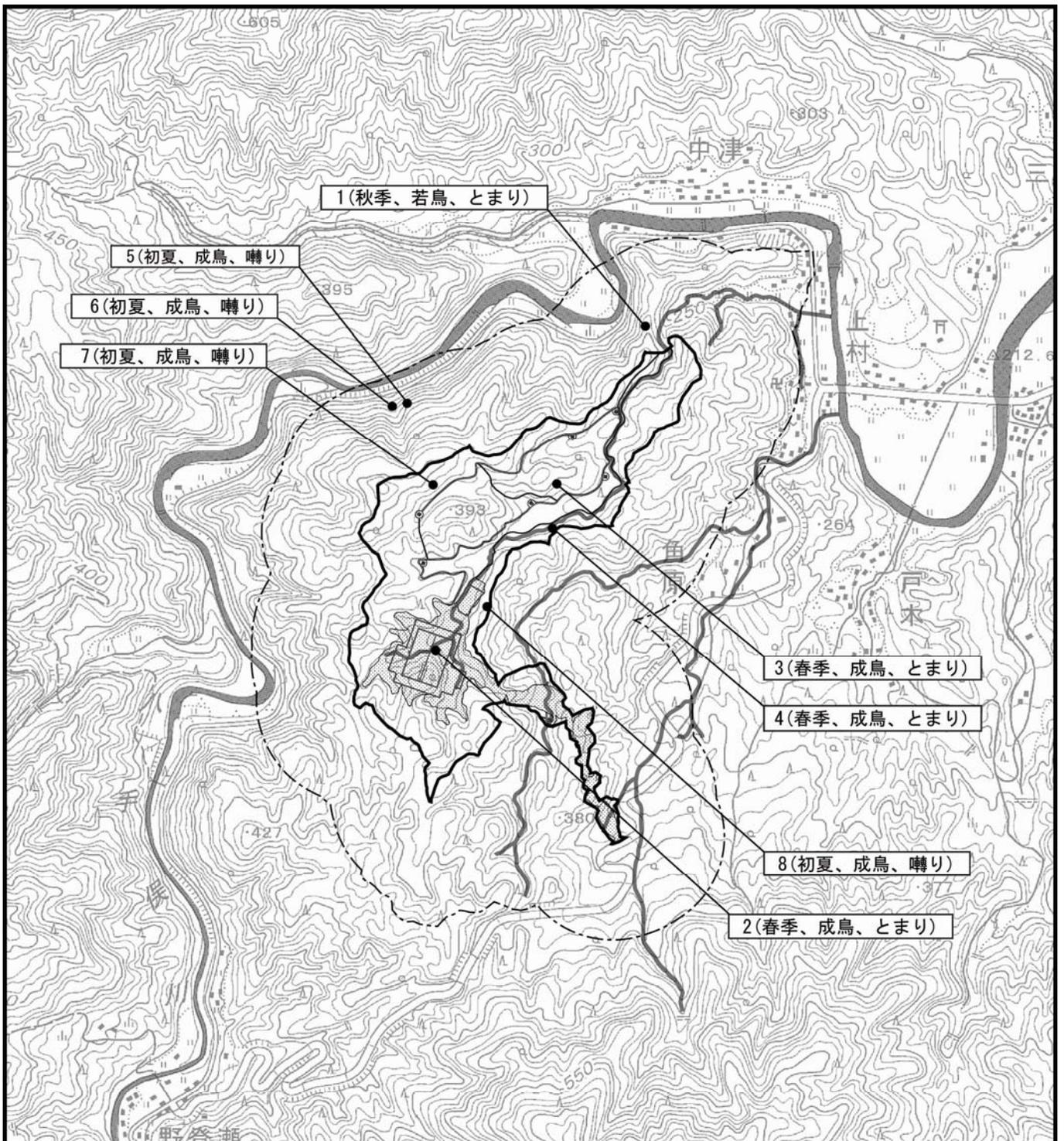
日本海の周辺地域で繁殖し、東南アジアで越冬する。国内では、北海道、本州、四国、九州等に夏季渡来して繁殖する。近畿地方では全府県に夏鳥として渡来し繁殖している。低山から山地にかけての溪流沿いの発達した林もしくは林縁部で営巣し餌をとる。餌は昆虫類である。三重県では繁殖個体群がまばらに分布し、生息個体数は3～4桁である（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成14年、山岸哲）他）。

現地調査では秋季に周辺域で1回・1個体、春季に対象事業実施区域で3回・延べ3個体、初夏に対象事業実施区域で2回・延べ2個体、周辺域で2回・延べ2個体が確認された。確認環境はアラカシ群落、アカマツ群落、コナラ群落、スギ・ヒノキ植林であった。

本種は夏鳥であり、春季・初夏において確認された。確認例は少なく、5月以降の確認がないことから対象事業実施区域及び周辺域での繁殖の可能性は低いと考えられる。

表 8.9.2-37 オオルリの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	秋季	平成 22 年 10 月 15 日	若鳥雄がアラカシ群落の林内でとまり、その後枝移りし、茂みで見えなくなる。
2	春季	平成 23 年 4 月 25 日	成鳥雄がコナラ群落内でとまり、鳴く。
3	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雄がアカマツ群落の木の枝にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
4	春季	平成 23 年 4 月 26 日	成鳥雌がコナラ群落の木の枝にとまる。樹冠内を枝移りし、見えなくなる。
5	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内でとまる。枝移りしながら囀る。
6	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内でとまり、囀る。
7	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	成鳥雄がスギ・ヒノキ植林内でとまり、囀る。
8	初夏	平成 23 年 5 月 31 日	成鳥雄がコナラ群落とスギ・ヒノキ植林の境界付近の枝にとまる。枝移りしながら囀る。



凡 例

- 1(秋季、若鳥、とまり) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-35 オオルリの確認位置

— 対象事業実施区域

○ 調査範囲

● 改変区域



1:15,000

0 100 200 300 400 500m

● エゾビタキ

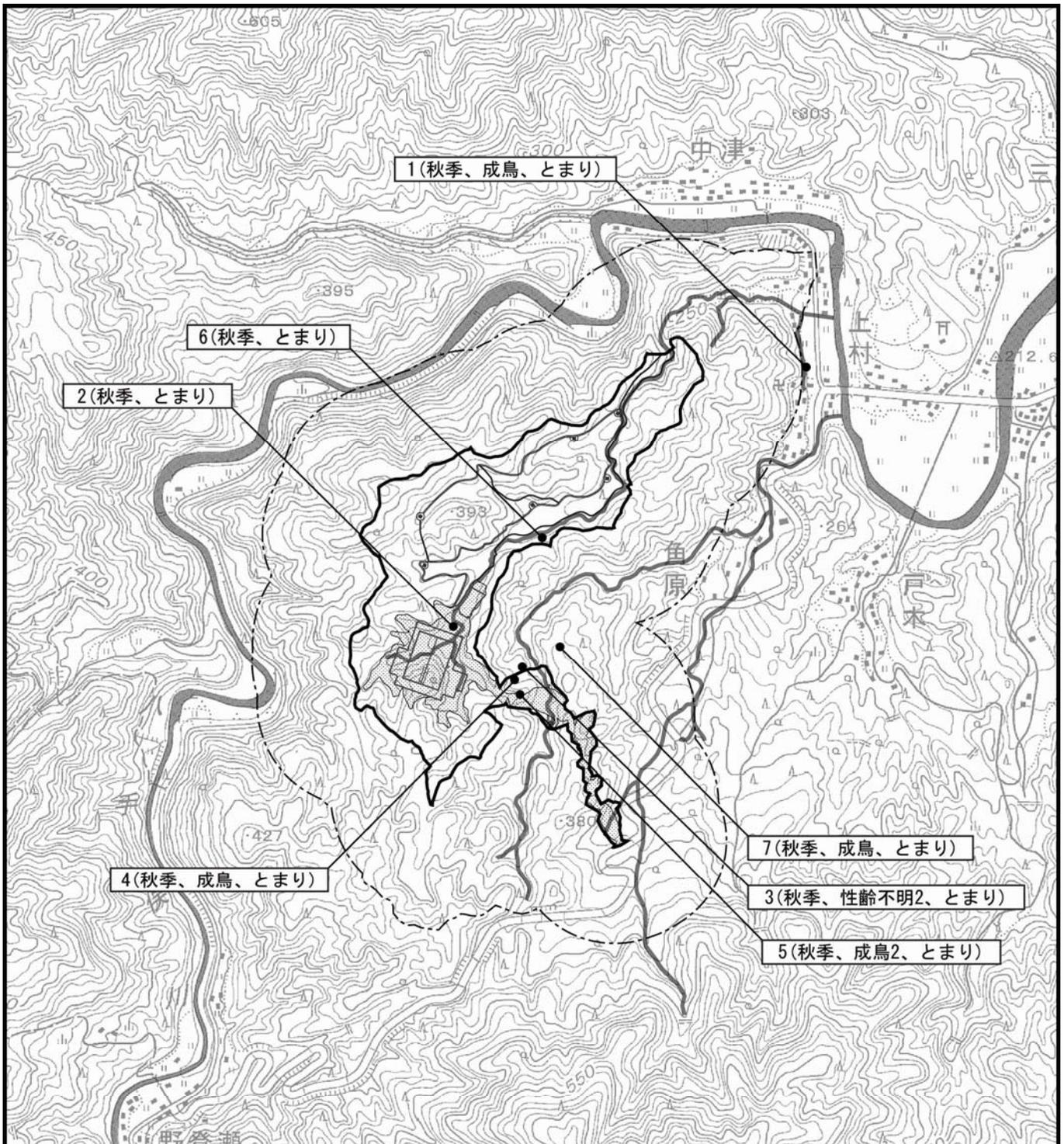
日本には春と秋に通過するが、多くの地方では秋のほうが多い。低地から低山の林に渡来する。餌は木の実や昆虫類などを捕える。県内では亀山市、松阪市、伊賀市、伊勢市、鳥羽市、大紀町紀勢で確認されている(参考:「原色 日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」(平成7年、保育社)、「三重県レッドデータブック 2005 動物」(平成18年、三重県))。

現地調査では秋季に対象事業実施区域で4回・延べ5個体、周辺域で3回・延べ4個体が確認された。確認環境はコナラ群落、スギ・ヒノキ植林であった。

本種は旅鳥であり、確認状況から渡り期の移動個体と考えられる。

表 8.9.2-38 エゾビタキの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	秋季	平成22年10月13日	成鳥がスギ・ヒノキ植林の樹冠の枝にとまる。枝移りし見えなくなる。
2	秋季	平成22年10月13日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の樹冠の枝にとまる。枝移りし見えなくなる。
3	秋季	平成22年10月13日	性齢不明の2個体がスギ・ヒノキ植林の林縁部の枝にとまり、その後飛び立ち見えなくなる。
4	秋季	平成22年10月13日	成鳥がスギ・ヒノキ植林の林縁部の枝にとまり、その後飛び立ち見えなくなる。
5	秋季	平成22年10月13日	成鳥2個体がスギ・ヒノキ植林の林縁部の枝にとまり、その後飛び立ち見えなくなる。
6	秋季	平成22年10月15日	性齢不明がコナラ群落の樹冠の枝にとまる。枝移りし見えなくなる。
7	秋季	平成22年10月19日	成鳥がスギ・ヒノキ植林の樹冠の枝にとまる。枝移りし見えなくなる。



凡 例

- 1(秋季、成鳥、とまり) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-36 エゾビタキの確認位置

- 対象事業実施区域
- ⋯⋯ 調査範囲
- ▨ 改変区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

● コサメビタキ

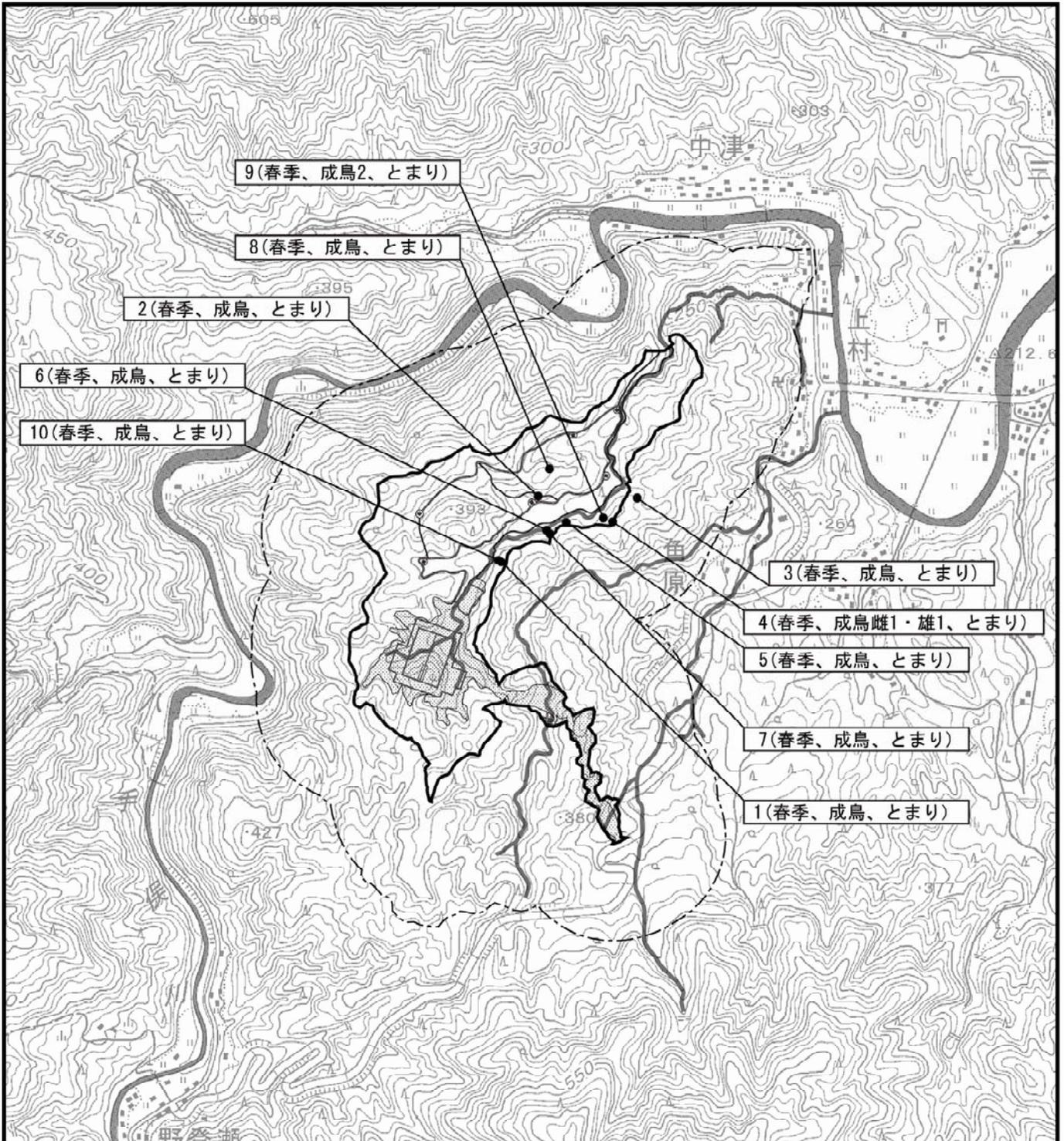
日本には夏鳥として4月ごろ渡来し、北海道から九州までの全国各地で繁殖する。樹林に生息し、餌は昆虫類などを捕える。県内では、木曾岬町、いなべ市、菰野町、亀山市、津市、伊賀市、大台町大杉谷、伊勢市、鳥羽市、大紀町紀勢、尾鷲市、紀宝町で確認されている(参考:「原色 日本野鳥生態図鑑〈陸鳥編〉」(平成7年、保育社)、「三重県レッドデータブック 2005 動物」(平成18年、三重県))。

現地調査では春季に対象事業実施区域で9回・延べ11個体、周辺域で1回・1個体確認された。確認環境はコナラ群落、スギ・ヒノキ植林であった。

本種は旅鳥であり、春季に雌雄を確認したが、初夏以降の確認が無いため、対象事業実施区域及び周辺域での繁殖の可能性は低いと考えられる。

表 8.9.2-39 コサメビタキの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	春季	平成23年4月25日	成鳥性不明がコナラ群落の木にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
2	春季	平成23年4月26日	成鳥性不明がコナラ群落の木の枝にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
3	春季	平成23年4月26日	成鳥性不明がスギ・ヒノキ植林の枝にとまる。その後点々と枝移りし、見えなくなる。
4	春季	平成23年4月26日	成鳥雄1個体、成鳥雌1個体がコナラ群落の木にとまり、一瞬くちばしとくちばしを合わせていた。その後飛び立ち見えなくなる。
5	春季	平成23年4月26日	成鳥性不明がコナラ群落の木にとまり、鳴く。その後飛び立ち見えなくなる。
6	春季	平成23年4月26日	成鳥性不明がコナラ群落の木の枝にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
7	春季	平成23年4月26日	成鳥性不明がコナラ群落の木にとまり、鳴く。その後飛び立ち見えなくなる。
8	春季	平成23年4月27日	成鳥性不明がアカマツ群落の木の枝にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
9	春季	平成23年4月27日	成鳥性不明の2個体がコナラ群落の木にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
10	春季	平成23年4月27日	成鳥性不明がコナラ群落の木にとまり、鳴く。その後飛び立ち見えなくなる。



凡 例

- 1(春季、成鳥、とまり) : 確認位置 番号(時季、年齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-37 コサメビタキの確認位置

—— 対象事業実施区域

⋯⋯ 調査範囲

▨ 改変区域



1:15,000

0 100 200 300 400 500m

● キバシリ

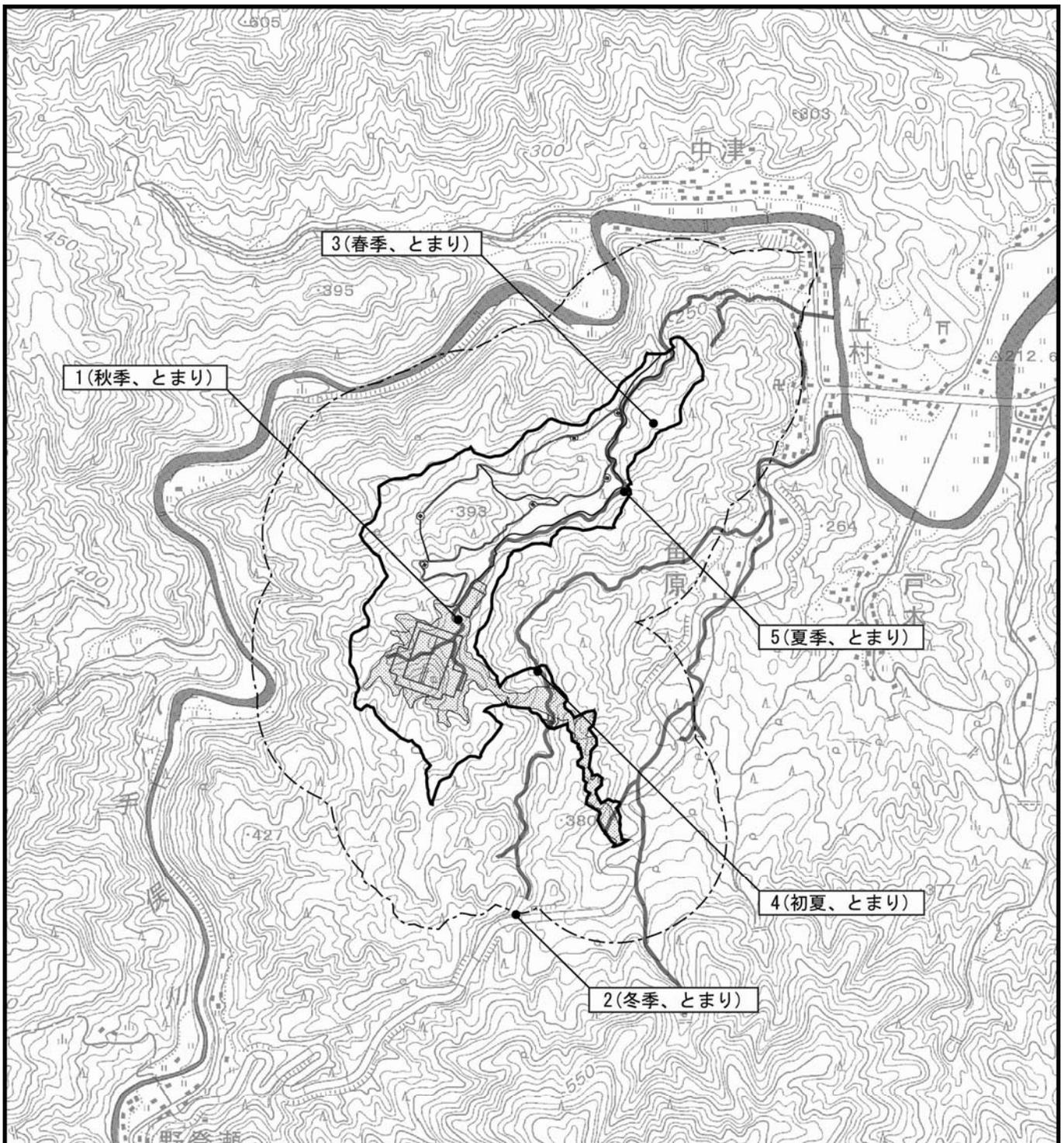
国内では、北海道、本州、四国、九州に生息する。近畿地方では大阪府を除く6府県に周年生息し、滋賀県を除く5府県で繁殖する留鳥である、もしくはそう考えられる。繁殖地は比較的限られている。山地帯以上のブナ・ミズナラ等の落葉広葉樹林、スギ・モミ等が混じる針広混交林、トウヒ・シラビソ等の針葉樹林の林内で営巣する。昆虫類などを捕食する(参考:「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」(平成14年、山岸哲))。

現地調査では秋季に対象事業実施区域で1回・1個体、冬季に周辺域で1回・1個体、春季に対象事業実施区域で1回・1個体、初夏に対象事業実施区域で1回・1個体、夏季に対象事業実施区域で1回・1個体確認された。確認環境はスギ・ヒノキ植林、コナラ群落であった。

同種は年間を通して確認されたが、繁殖行動が確認されなかったこと、確認例が少ないことから対象事業実施区域及びその周辺における繁殖の可能性は少ないと考えられる。

表 8.9.2-40 キバシリの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	秋季	平成 22 年 10 月 13 日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の木にとまる。その後幹を登り、見えなくなる。
2	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林でカラ類混群の中と共にとまる。林内を飛翔し見えなくなる。
3	春季	平成 23 年 4 月 12 日	性齢不明がコナラ群落の木にとまる。その後幹を登り、見えなくなる。
4	初夏	平成 23 年 5 月 18 日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の木にとまる。その後枝移りし、見えなくなる。
5	夏季	平成 23 年 7 月 13 日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の木にとまる。その後幹を登り、見えなくなる。



凡 例

- 1(秋季、とまり) : 確認位置 番号(時季、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-38 キバシリの確認位置

—— 対象事業実施区域

⋯⋯ 調査範囲

▨ 変更区域



1:15,000

0 100 200 300 400 500m

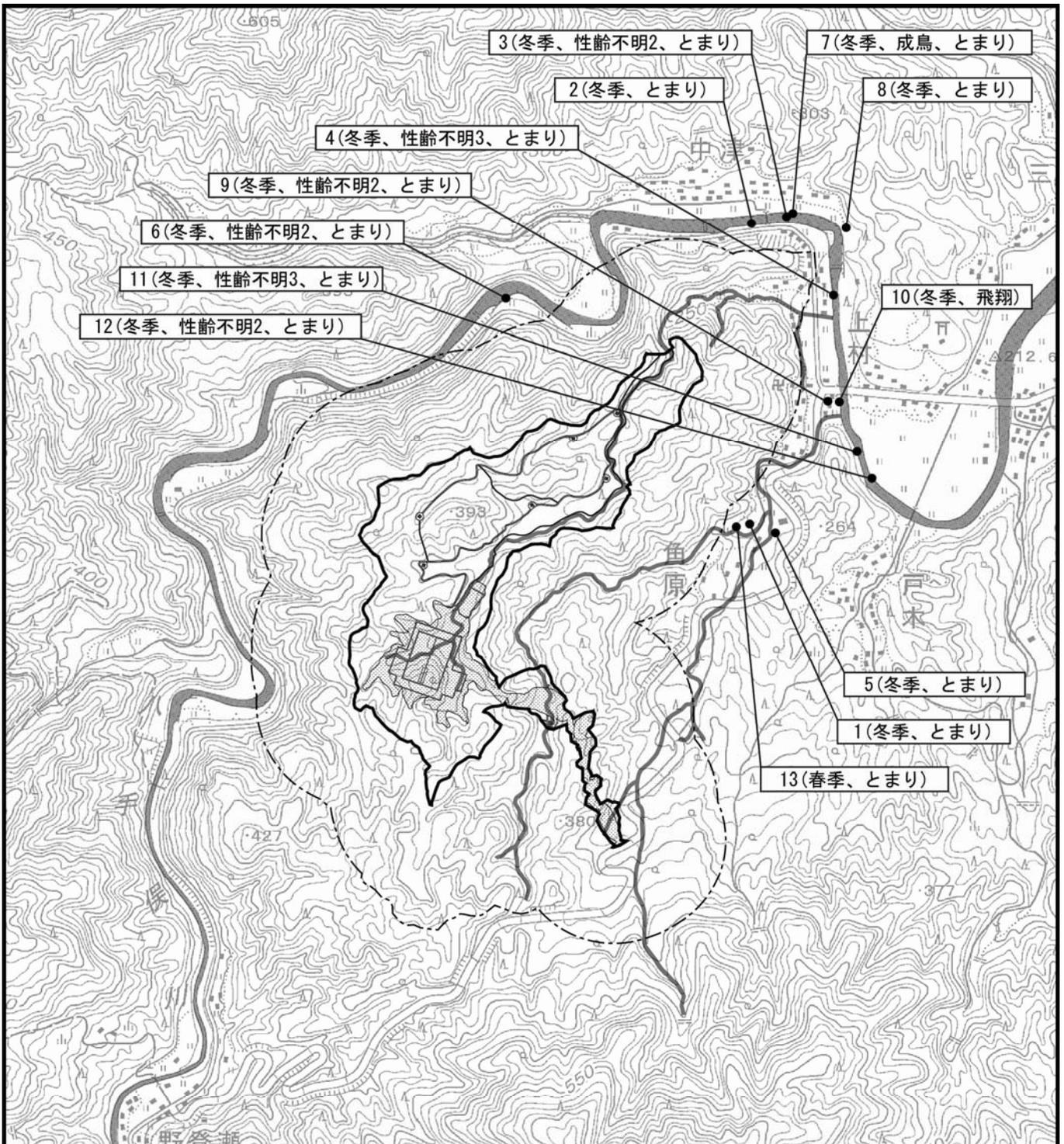
• アオジ

国内では、北海道、本州で繁殖し、主に本州以南で越冬する。近畿地方では冬季には全府県に生息する。高原の草原から林縁にかけて営巣し餌をとる。冬季は平地から低山にかけての林内や林縁あるいは湖沼・河川・農耕地のヨシ原を含む草原に生息する。餌は、イネ科やタデ科などの種子である（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成 14 年、山岸哲）他）。

現地調査では冬季に周辺域で 12 回・延べ 20 個体、春季に周辺域で 1 回・1 個体が確認された。確認環境は河川のツルヨシ群落やスギ・ヒノキ植林、竹林、茶畑等であった。本種は冬鳥であり、確認状況から越冬個体、または移動個体と考えられる。

表 8.9.2-41 アオジの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	冬季	平成 23 年 1 月 31 日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林の林縁にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
2	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	性齢不明がツルヨシ群落内にとまる。その後茂みに入り見えなくなる。
3	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	性齢不明の 2 個体がツルヨシ群落内にとまる。その後茂みに入り見えなくなる。
4	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	性齢不明の 3 個体がツルヨシ群落内にとまる。その後茂みに入り見えなくなる。
5	冬季	平成 23 年 2 月 1 日	性齢不明がメダケ群落内にとまる。その後茂みに入り見えなくなる。
6	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	性齢不明の 2 個体がスギ・ヒノキ植林内の茂みにとまる。その後枝移りし、見えなくなる。
7	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	成鳥雄が八手俣川沿いの電線にとまる。その後飛び立ち見えなくなる。
8	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	性齢不明が茶畑内にとまる。その後跳び歩き、見えなくなる。
9	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	性齢不明の 2 個体がツルヨシ群落内にとまる。その後茂みに入り見えなくなる。
10	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	性齢不明が八手俣川の上を飛翔し、ツルヨシ群落に入り見えなくなる。
11	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	性齢不明の 3 個体がツルヨシ群落内にとまる。その後茂みに入り見えなくなる。
12	冬季	平成 23 年 2 月 2 日	性齢不明の 2 個体がツルヨシ群落内にとまる。その後茂みに入り見えなくなる。
13	春季	平成 23 年 4 月 26 日	性齢不明がスギ・ヒノキ植林内の茂みにとまる。



凡 例

- 1(春季、成鳥、歩行) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-39 アオジの確認位置

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
- 改変区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

● クロジ

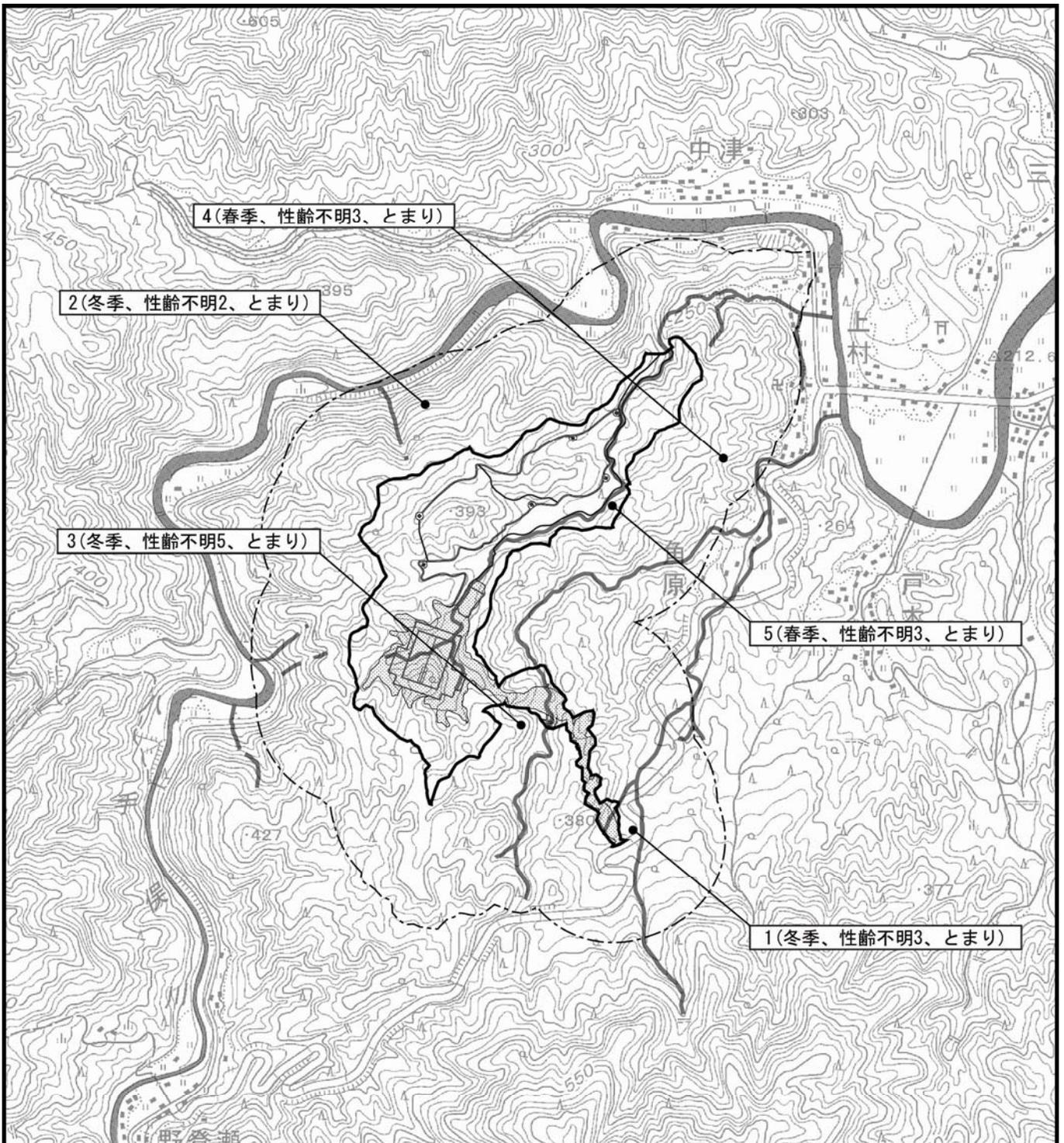
国内では主に北海道、本州の中部以北で繁殖し、本州、四国、九州で越冬する。日本が世界の繁殖分布の重要な部分を占める。国内の繁殖個体数は多くない。近畿地方では冬季には全府県に生息するが、繁殖地は特定の場所に限られる。山地の林床にササが茂る落葉広葉樹林の林内もしくは林縁部で繁殖する。冬季は平地から山地の低木の発達した暗い広葉樹林や針広混交林に生息する。主に種子を食べるが昆虫類等も捕食する（参考：「近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発」（平成14年、山岸哲））。

現地調査では、冬季に周辺域で3回・延べ10個体、春季に対象事業実施区域で1回・3個体、周辺域で1回・3個体が確認された。確認環境はスギ・ヒノキ植林、路傍・空地雑草群落であった。

本種は冬鳥であり、確認状況から越冬個体、または移動個体と考えられる。

表 8.9.2-42 クロジの確認状況

No.	確認時期		確認内容
1	冬季	平成23年2月1日	性齢不明の3個体が路傍・空地雑草群落内にとまる。その後茂みに入り見えなくなる。
2	冬季	平成23年2月3日	性齢不明の2個体がスギ・ヒノキ植林の下層にとまる。その後小刻みに飛翔し、見えなくなる。
3	冬季	平成23年2月4日	性齢不明の5個体がスギ・ヒノキ植林の枝にとまる。その後枝移りし、見えなくなる。
4	春季	平成23年4月26日	性齢不明の3個体がスギ・ヒノキ植林の下層にとまる。その後小刻みに飛翔し、見えなくなる。
5	春季	平成23年4月26日	性齢不明の3個体がスギ・ヒノキ植林の木の枝にとまる。その後枝移りし、見えなくなる。



凡 例

- 1(冬季、性齢不明、とまり) : 確認位置 番号(時季、齢、状況)

※図中の番号は確認状況の表に対応している

図 8.9.2-40 クロジの確認位置

- 対象事業実施区域
- 調査範囲
- 変更区域



1:15,000
0 100 200 300 400 500m

(3) 予測・環境保全措置及び評価

鳥類に係る環境影響の予測概要は表8.9.2-43に示すとおりである。

予測は、事業特性及び地域特性において鳥類に係る特別な条件等がないことから、技術指針等において示されているように、鳥類への影響を事例の引用または解析により定性的に予測する手法を用いた。

表 8.9.2-43 鳥類に係る予測概要

影響要因	項目	予測事項	予測方法	予測地域	予測対象時期等
工事の実施	鳥類及びそれらの生息環境 重要な種及び注目すべき生息地	重機の稼働、資材の運搬に伴う工事用車両の走行、樹木の伐採・処理、土地の造成、発破、地盤改良、工作物の建設、工事用道路等の建設による影響	予測対象種の生息環境や生息地と事業計画を重ね合わせ、その変更程度を整理し、予測対象種の生息に及ぼす影響の程度を事例の引用若しくは解析により、定性的に予測	調査地域と同様の地域	工事期間中
		造成地の存在、工作物の存在、土地の利用、工作物の供用・稼働、関係車両の走行及び緑化等による影響			事業活動が定常状態となる時期

1) 予測内容

予測内容は以下に示す2項目とした。

- ・鳥類及びそれらの生息環境への影響
- ・重要な種及び注目すべき種への影響

2) 予測対象時期

予測対象時期は、工事の実施は工事期間中とし、存在及び供用は事業活動が定常状態となる時期とした。

3) 予測地域

現地調査の範囲と同様の範囲とした。

4) 予測方法

予測方法は、予測内容ごとに以下に示す方法を用いた。

① 鳥類及びそれらの生息環境への影響

工事中は対象事業実施区域の変更による鳥類の生息環境の変化を植生の変化より把握

するとともに工事の実施方法から類似事例を参考に定性的に予測した。また、供用後は施設の稼働状況から類似事例を参考に定性的に予測した。

② 重要な種及び注目すべき種への影響

工事中は生息確認位置と事業計画を重ね合わせ、重要な種の生息地への影響を把握するとともに工事の実施方法から類似事例を参考に定性的に予測した。また、供用後は施設の稼働状況から類似事例を参考に定性的に予測した。

5) 予測結果

① 鳥類及びそれらの生息環境への影響

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

樹林地を好む鳥類の生息環境の変化を植生の変化で把握すると、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、工事中は発破や工事用の機械の稼働に伴い騒音・振動の発生により、一時的な逃避が推定されるが、工事完了後は速やかに生息環境が回復すると予測される。

草地を好む鳥類の生息環境は伐採跡地などの乾性草地は1.8%が、0.2%減少し、1.6%となるが変化はほとんどない。また、対象事業実施区域内の谷に分布する湿性草地は4.5%が、1.5%減少し3.0%となるが変化は少ない。供用後は、のり面などの緑化により新たな生息環境が形成される。

対象事業実施区域周辺には、水辺を好む鳥類が生息する八手俣川や角原川がある。工事に伴い角原川の上流は直接的な改変の影響を受けるが進入路の建設に伴うわずかな範囲であり、上流及び下流には直接的な改変の影響はない。また、八手俣川には事業実施に伴う直接的な改変の影響はない。なお、工事中の濁水やコンクリート工事に伴う処理水の影響や供用後の生活排水の処理水が周辺の水域に及ぼす影響は第8章8.6水質の工事中の水質予測及び供用後の水質予測の結果、水質への影響は軽微であるとされていることから、水辺を好む鳥類の生息環境に及ぼす影響も少ないと予測される。

② 重要な種及び注目すべき種への影響

● ミサゴ

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は八手俣川の南東を南西方向に飛翔した個体であり、事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。また、同種は魚類を捕食する河川・湖沼等に依存した鳥類であるが、事業実施に伴い八手俣川など対象事業実施区域周辺の水域に及ぼす生息環境への影響はほとんどないと予測される。

● ハチクマ

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域周辺の樹林の上空に移動中の個体が確認されたものである。

同種は夏鳥として渡来し、主に樹林地に生息する。対象事業実施区域及びその周辺では確認も少なく、繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により6.5%増加して、79.5%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **オオタカ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域外の南西側約2km以上はなれた樹林に営巣地がある。行動圏内部構造の推定結果及び飛翔範囲から対象事業実施区域は営巣中心域や高利用域に含まれないことから事業の実施が繁殖に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **ツミ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域内の北側の緑地公園予定地に営巣地が確認されたが、繁殖経年的でなく、今後も繁殖するか否か不明である。当該地域で繁殖した場合は、工事中の繁殖に及ぼす影響は避けられない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **ハイタカ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は冬鳥として渡来し、主に樹林地に生息する。対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **ノスリ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は留鳥として主に樹林地に生息する。対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により

5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **サシバ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は夏鳥として渡来し、主に樹林地に生息して営巣する。対象事業実施区域に最も近接するNTつがいは、対象事業実施区域の一部が営巣中心域及び高利用域に含まれる。また、THつがい、YMつがいの行動圏内部構造は、対象事業実施区域は営巣中心域には含まれないものの高利用域の一部に含まれることから、工事の実施及び土地又は工作物の存在及び供用に伴う影響が予測される。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- また、餌となるカエルやヘビなどが生息する水田・耕作地は、対象事業実施区域外の北側、八手俣川に沿って広く分布し、事業実施に伴いこれらの環境に変化はないことから生息環境に及ぼす影響はない。

- なお、対象事業実施区域周辺に渡来して営巣する同種は、営巣地が一定しないものが多く、予測結果に不確実性が残る。

- **クマタカ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- クマタカへの予測評価は、生態系の上位性の項に記述する。

- **ハイイロチュウヒ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域外北側の樹林地上空を旋回上昇していた移動個体が確認されたものである。同種は冬鳥として渡来し、草地に生息する。対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。

- **ハヤブサ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域周辺の樹林で確認されたものである。同種は留鳥として生息し、主に崖地に営巣する。確認例も少なく対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。

- **チョウゲンボウ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域外の北東側、八手俣川に沿った耕作地上空で確認されたものである。同種は留鳥として生息し、耕作地や草地を主な生息の場とする。確認例も

少なく対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。

- ヤマドリ

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は留鳥として主に樹林地に生息する。対象事業実施区域及びその周辺に生息し、繁殖している。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- イカルチドリ

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域外の北側、八手俣川の河原で生息を確認した。同種は河原を好んで生息する。繁殖は確認されておらず事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。また、河川・湖沼等に依存した鳥類であるが、事業実施に伴い八手俣川など対象事業実施区域周辺の水域に及ぼす生息環境への影響はほとんどないと予測される。

- イソシギ

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

【同種は対象事業実施区域外の北側、八手俣川の河原で生息を確認した。同種は旅鳥であり、繁殖は確認されておらず事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。また、河川・湖沼等に依存した鳥類であるが、事業実施に伴い八手俣川など対象事業実施区域周辺の水域に及ぼす生息環境への影響はほとんどないと予測される。

- ツツドリ

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は夏鳥として渡来し、主に樹林地に生息・繁殖する。対象事業実施区域及びその周辺に生息は確認されたが、繁殖は確認されておらず事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- ホトトギス

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域周辺の樹林で確認されたものである。同種は夏鳥として渡

来し、主に樹林地に生息・繁殖する。対象事業実施区域及びその周辺に生息は確認されたが、繁殖は確認されておらず事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **アオバズク**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 繁殖を確認した位置は、対象事業実施区域外であることから、業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **フクロウ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域周辺及びその周辺の南東から北東部の樹林で生息が確認されているが、繁殖は確認されていないことから業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **ヨタカ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域周辺及びその周辺で生息が確認されているが、繁殖は確認されていないことから事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **ヤマセミ、カワセミ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 対象事業実施区域周辺の八手俣川及び角原川で生息が確認され繁殖も確認した。これらの種の生息地は河川周辺であり、営巣地は直接的な改変を受けないことから繁殖に及ぼす影響はない。なお、工事中の濁水やコンクリート工事に伴う処理水の影響や供用後の生活排水の処理水が周辺の水域に及ぼす影響は第8章8.6水質の工事中的水質予測及び供用後の水質予測の結果、水質への影響は軽微であるとされていることから、これらの種の生息環境に及ぼす影響も少ないと予測される。

- **アカショウビン**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は夏鳥として渡来し、対象事業実施区域周辺及びその周辺で生息が確認されているが、繁殖は確認されていないことから事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。

- 同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- また、工事中の濁水やコンクリート工事に伴う処理水の影響や供用後の生活排水の処理水が周辺の水域に及ぼす影響は第8章8.6水質の工事中の水質予測及び供用後の水質予測の結果、水質への影響は軽微であるとされていることから、同種の生息環境に及ぼす影響も少ないと予測される。

- **アリスイ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域内の樹林で確認されたものである。同種は冬鳥として渡来し、主に樹林地に生息する。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **アオゲラ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は留鳥として主に樹林地に生息する。対象事業実施区域外の西側の樹林地で繁殖している。繁殖が確認された地域は対象事業実施区域外であることから、繁殖に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **アカゲラ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は留鳥として主に樹林地に生息する。対象事業実施区域及びその周辺に生息し、繁殖している。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす

影響は少ない。

- **オオアカゲラ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域で確認されたものである。同種は留鳥として主に樹林地に生息する。対象事業実施区域の東側の樹林地で繁殖している可能性が高いが、繁殖が確認された地域は改変区域から 300m～400m程度離れていることから騒音の影響も十軽減される距離であり、繁殖に及ぼす影響は少ない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では 93.3%の樹林地が 20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により 5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **ビンズイ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は冬鳥として渡来し、主に樹林地に生息する。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では 93.3%の樹林地が 20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により 5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **サンショウクイ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域外の西側の樹林で確認されたものである。同種は夏鳥として渡来し、主に樹林地に生息・繁殖する。対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では 93.3%の樹林地が 20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により 5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **カワガラス**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域外の北側、八手俣川の河原で生息を確認した。同種は河原を好んで生息する。繁殖は確認されておらず事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。また、事業実施に伴い八手俣川の高山川との合流付近より上流の生息環境への影響はない。

- **ミソサザイ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で広く確認されたものである。同種は

留鳥として主に樹林地に生息する。対象事業実施区域及びその周辺に生息し、繁殖している。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **ルリビタキ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は冬鳥として渡来し、主に樹林地に生息する。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **トラツグミ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は留鳥として主に樹林に生息するが、繁殖は確認されていないことから事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **クロツグミ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で広く確認されたものである。同種は留鳥として主に樹林地に生息する。対象事業実施区域及びその周辺に生息し、繁殖している。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **メボソムシクイ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域外の北側の樹林で確認されたものである。同種は夏鳥として渡来し、主に樹林地に生息・繁殖する。対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はな

いことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **センダイムシクイ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域外の北側の樹林で確認されたものである。同種は夏鳥として渡来し、主に樹林地に生息・繁殖する。対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **キビタキ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域及び周辺の樹林で広く確認されたものである。同種は夏鳥として渡来し、主に樹林地に生息・繁殖する。対象事業実施区域東側の樹林で幼鳥2羽のとまりを確認しておりこの付近に営巣していると推定される。幼鳥が確認された位置はの改変区域より400m以上離れているため、騒音の影響も十軽減される距離であり、同種に及ぼす影響はほとんどない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **オオルリ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

同種は対象事業実施区域及び周辺の樹林で広く確認されたものである。同種は夏鳥として渡来し、主に樹林地に生息・繁殖する。対象事業実施区域及びその周辺では繁殖が確認されていないことから同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **エゾビタキ、コサメビタキ**

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

対象事業実施区域及び周辺の樹林で確認されたものである。同種は旅鳥として渡来し、主に樹林地に生息する。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **キバシリ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域内の樹林で確認されたものである。同種は留鳥として主に樹林に生息するが、繁殖は確認されていないことから事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない。同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

- **アオジ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は冬鳥として渡来し、対象事業実施区域周辺の八手俣川及び角原川で生息が確認された。これらの種の生息地は河川周辺であり、直接的な改変を受けないことから繁殖に及ぼす影響はない。

- **クロジ**

- 【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

- 同種は対象事業実施区域及びその周辺の樹林で確認されたものである。同種は冬鳥として渡来し、主に樹林地に生息する。繁殖は確認されていないことから事業実施に伴う同種に及ぼす影響はない同種の主な生息地となる樹林地は、対象事業実施区域では93.3%の樹林地が20.3%減少して、73.0%となるが、立木植栽により5.9%増加して、78.9%まで回復する。また、周辺の樹林地への影響はないことから事業実施に伴う生息環境に及ぼす影響は少ない。

6) 環境保全措置

① 環境保全措置の検討項目

環境保全措置の検討項目は表 8.9.2-44 に示すとおりである。

ア) 鳥類及びそれらの生息環境への影響

【工事の実施】

工事中は、土砂の流出や樹林の伐採により生息環境の変化が予測される。従って、保全対策を検討する。

【土地又は工作物の存在及び供用】

土地又は工作物の存在及び供用では、樹林の減少、施設の存在などにより生息環境の変化が予測される。従って、保全対策を検討する。

イ) 重要な種及び注目すべき生育地への影響

【工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用】

重要な種として選定された 42 種のうち、40 種については、対象事業による影響がない又は少ないと判断されることから、環境保全措置の検討対象から除外した。このため残った重要な種サシバ、クマタカを対象に環境保全措置の検討を行なった。

表 8.9.2-44 鳥類保全措置の検討項目

項目	予測結果の概要	環境保全措置の検討	
		工事中	供用後
鳥類及びそれらの生息環境	事業の実施により、樹林地の減少に伴い主に樹林地に生息する鳥類の生息環境が減少する。	○	○
サシバ	サシバの高利用域が、改変区域にかかるほか、営巣地の位置が変わるなど予測結果に不確実性が残る。	○	○
クマタカ	クマタカ A つがいは、営巣地が変わる可能性があり、予測結果に不確実性が残る。	○	○

注) ○ : 環境保全措置を実施する項目

② 環境保全措置の検討

鳥類では鳥類及びそれらの生息環境への影響や重要な種のうちサシバ及びクマタカが工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用により直接的な影響を受ける。

このため、これらの影響に対して、環境保全措置案の検討、実行可能な技術が取り入れられているかどうかの検討等により、事業者の実行可能な範囲で環境影響が出来る限り回避・低減されているかを検証した。

工事の実施、土地又は工作物の存在及び供用における環境保全措置の検討結果及び検証は表 8.9.2-45 に示すとおりである。

表 8.9.2-45 鳥類の検討項目

影響要因	影響の種類	環境保全措置	環境保全措置の効果	実施に伴い生ずる恐れのある他の環境への影響	検討結果の経緯等	実効性
工事の実施	鳥類及びその生息環境	仮設沈砂池、土砂流出防止柵等の設置	生息環境の保全	土砂流出防止により水質、植生、水生生物、生態系が保全される。	土木工事では、実施事例も多く、効果が期待できる。	○
		低騒音・低振動型機械の使用	施工区域周辺の生息環境保全	騒音・振動の低減とこれに伴う水生生物、生態系が保全される。	土木工事では、実施事例も多く、効果が期待できる。	○
		工事関係者への環境保全の啓発	生息環境の保全	植物、水生生物、生態系が保全される。	重要種の保全、ごみ管理の徹底、安全走行等の環境保全に関する意識が向上する。	○
存在及び供用		造成地及びのり面の緑化	植生の回復	植生が回復することにより陸上動物の生息環境、生態系の一部が回復する。	土木工事では、実施事例も多く、効果が期待できる。	○
工事の実施	サシバ	繁殖期の配慮	継続的な繁殖	動物、生態系が保全される	土木工事では、実施事例も多く、効果が期待できる。	○
存在及び供用						○
工事の実施	クマタカ	繁殖期の配慮	継続的な繁殖	動物、生態系が保全される。	土木工事では、実施事例も多く、効果が期待できる。	○
存在及び供用						○

注)○：環境保全措置を実施する項目

③ 検討結果の整理

実施する環境保全措置の検討及び検証を整理したものを表 8.9.2-46 に示す。

表 8.9.2-46 環境保全措置の検討及び検証の整理

影響要因	影響の種類	項目	検討及び検証内容		
工の事実	鳥類及びそれらの生息環境	沈砂池、土砂流出防止柵等の設置	沈砂池：調整池工事では、沈砂池を先行して施工することにより、降雨時の土砂の流出を防止する。また、造成区域周辺に仮設沈砂池を配置することで土砂流出を防止する。 土砂流出防止柵：周辺の樹林地への土砂流出を防止するため、板柵やフトン籠等を設置して樹林を保全する。		
		低騒音・低振動型機械の使用	造成に伴う騒音・振動では低騒音型建設機械の採用、作業方法の改善により騒音、振動の低減を図る。また、発破作業では火薬を低減する。		
		工事関係者への環境保全の啓発	ごみの管理、重要種への配慮についてパンフレット等により注意を喚起する。		
		緑化	緑化は、郷土種により行う。のり面は、播種により直ちに緑化を図り、表土の流出を防止する。また、造成地における植栽はアカマツ、モミ、ケヤキ、コナラ、クリ、アラカシ、ツブラジイ、エゴノキ、マンリョウ等により緑化を図る。		
存在及び供用					
重要な種	対象となる鳥類		サシバ	クマタカ（Aつがい）	
	環境影響		繁殖への影響		
	環境保全措置の案		<ul style="list-style-type: none"> 事後調査を実施して営巣の動向を把握する。 営巣地が施工区域に近い場合は工事の実施方法を検討する。 事後調査、工事の実施方法については学識経験者の助言を受けながら判断する。 		
	環境保全措置の内容	実施期間		<ul style="list-style-type: none"> 工事中：平成 25 年 4 月～平成 31 年 3 月まで 供用後：施設の完成後 2 年間 	
		実施範囲		対象事業実施区域及びその周辺	
		実施方法		定点観察及び現地踏査	
		実施条件		4 月～7 月まで毎月実施	11 月から翌々年 2 月まで
	環境保全措置を講じた後の生息への影響		繁殖の推移を把握することができ、事業実施に伴う影響を最小化できる。		
	環境保全措置の効果		<ul style="list-style-type: none"> 繁殖機会の減少の影響を少なくすることができ、個体数の維持、増加に寄与することができる。 地域の健全な生態系を維持することができる。 		
	環境保全措置の効果の不確か性の程度		営巣地の変化に対応した保全対策を効果的に講じることができる。		
	環境保全措置の実施に伴って生じる、周辺環境への影響		周辺環境への影響は軽微であると考えられる。		
	環境保全措置の課題		事後調査及び工事実施体制の確立。		
環境保全措置の検証		環境保全措置案は事業実施による生息個体減少の最小化が図られる。			

7) 評価結果

環境保全措置として、「沈砂池・土砂流出防止柵等の設置」、「低騒音・低振動型機械の使用」、「工事関係者への環境保全の啓発」、「緑化」を実施する。

よって、環境への影響は事業者の実行可能な範囲で、回避又は低減が図られていると評価する。

また重要な種である、サンバ、クマタカについては、事業者の実施可能な範囲で対策が講じられ、事業実施に伴う影響の回避・軽減措置が講じられていると評価される。